とう〳〵東京に居据る事にした。

何しろ己れの頭は東京の夏は暑いと云ふ觀念に捉はれてゐるから、少しでも蒸す樣な日があると堪らない樣に感ずる。況して彌生町の家は風通りのよくない平家であつたから、己れは我慢出來なくなつて、どうせ己れが避暑したと思へば大分金も入用てる話だ、だから旅に出たものとして其の金を足す事にして大きな風通しのいゝ家へ轉宅したら何うだと妻に提議した所、二つ返事で『それがいゝでせう』と賛成して呉れたから早速その準備にかゝり、足を棒にして『借家はいの！』と探し當てたのが此家である。

東京で赤坂だの麹町だの本郷だの小石川だのと云へば如何にも武家

の屋敷を聯想し、淺草などゝ云ふと、喧噪な商家を聯想するから僕は直覺的に淺草は嫌つたんだが、故意々々好意を持つて探がして呉れた友人が『君はそう云ふけど、一應家を見てから厭なら厭と云つたら何うだ、淺草らしくない珍らしい確つかりした家だぜ、それに日あたりはよし風通のよさと云つたら、一應是非見たまへ。』と無理に薦められる儘に『淺草なんざ』と素氣なくも云ひ兼ね、探して呉れた義理に一應は見る丈けでも宜からうと、妻と僕と友人の三人は北三筋町へと遣つて來た。

成程此家なら淺草らしくなし又之なら恥かしくもない、恥かしくない所か稍身分不相應の感がある値段も門構への堂々たるに似ず、麹町

邊のと較べものにならぬ位に安價い、何よりも内部の氣の利いた間取りや庭が相當にあるのに加へてカラリとして四邊の家より超然と高くとまつてゐるのが氣に入つた。

斯うなると直覺的も嫌もない、直ちに宿替へに取掛り直ちに移轉して了つた。己れは何よりも堂々たる門構へと、軒燈の附いてゐるのが一方ならぬホク〳〵ものであつた、東京で門構への家に住むなんて我〻如き身分の者の一寸出來る業ぢやない、況んや大松の配するに於てをや。だから己れの喜びつたら非常なもので用もないのに二階へ上がつたり下りたりした、一ッ二ッ勇ましい咳拂ひまでして見せた。

愈〻悉皆置く可き所に置く可きものを片附けた後で、己れは門を入

つたり出たり三四度繰返へした、氣がハッシャいで仕方がないんだものの、そして新たに標札を求めて特筆大書して西川他見男と認めた、從前の樣な讀めるか讀めない位の名刺を糊で張り付けたのと勝手が違う所謂西川他見男存在の意氣を確固たらしめたのさ。

嬉しさは單にそれのみに止まらない、己れはどつさりハガキを買ひ込んで、僅か一面識の者にまでも通知狀を發した、先つ地方宛の文句に曰はく、

『小生儀今回感ずる所あり、避暑の代はりに堂々たる門構への家に移轉仕り候間何卒御上京の際は是非々々御訪ね下され度、今迄の無音は門構へで無かりし故と何卒御容赦被下度候草々頓首』

又市内の知合の部へは

『門構へに住み申候、御來遊下され候節は二階の見晴しよき客室にて座蒲團の代はりに虎の皮をお薦め申可く候。

追伸、客室に恐れ入つたか、腹が立つたら飛んで來い』

又電話では之まで居所までやふやに云つてたのを悉皆改めて了つて、

『解つたかい、淺草の北三筋町六十六番地だよ、電車は兒島町で下りるんだ、松の木のはびこつた門構への家として訪ねて來れば直ぐ解るよ、強つて來てくれ給へ、ウン妻も見せるよ』

さて己れの妻君には學校へも通信しておけ、有りと總ゆる友達にも

報せろ、遠慮するに及ばないよと大騒ぎ。

『オイ妻一寸茲へ來給へ』

『ハイ何ですか』

『何日何時之から友人知合がどし掛けて遣つて來るかも知れぬ裝飾を十分にして置け。虎の皮の位置は此の邊でいゝだらうか。そして花も活けてナ』

『花活はありませんよ』

『困つたなア、何を愚圖々々してゐるんだい早く買つて來いつたら』

『餘り身分不相應をなさいますと、後で困りますよ』

『聲が大きい隣家へ聞えるぢやないか、なアに家相當の物を備へて置

かなくちや申譯げがない、お前も友人が來たつて、アラ君枝さんはいゝお金持ちの所へ嫁入りに來たのねえ幸福だわと思はれて氣持ちがいゝぢやないか』

『だつて貴方……』

『良人の命令ッ、謹んで遵奉すべし』

『ハイ、ハイ、』

『おや座蒲團が滅法汚ないなア、何とか工夫が無いか知ら。チエッ何人一時に來たつて皆麼虎の皮に欠括めておけ』

『其麼事をしたら一遍で欠點が解るぢやありませんか、客用の座蒲團は何うしたつて二三枚入用ますわ』

『又新調か、おい漸々財布が心細くなつたなア』

『どうしませう?』

『ねえ妻君、之から澤庵喰つてゐてもいゝから體面維持に務めようなア』

『お互にね、口先きばかしで無しに』

『お前は得難い妻だ、直ぐ良人の意中を諒察して呉れるから末頼まし い!』

翌日の夕刻だつた、御免と玄關に案内を乞ふ聲がする。

『オイ靜枝ッ、それッ虎の皮ッ』

著者附言『御用のお方は御遠慮なく上記番地へ』

◎一躍の紳士

己れも到々電車に飛乗りの出來ぬ身分になつて了つた。

と云ふのは外ではない己れも愈々一人前になつたからだ、その證據には今度新たに大島の羽織と伊勢崎の着物を新調したので夫の事が首肯かれるだろう。何日までも木綿の着物でもないからね。

一日己れは計らずも冬服の著しく汚なく穢れてゐるのに氣が附いた、恰もその時は今しも某重役の所へ出掛けようとする突嗟であつたからヒタと許り困つた、顧みればあとは木綿の着物二枚しかない、之れを着て行つても差支へはないが、何だが威しが利かない樣に思ふ

書生ッぺらしく取られる氣附かいがある。ハテ何うしたものかと小首傾げて稍思案の後ハタッと横手を打つが早いか己れは直ぐ飛び出て森田の家へ驅け付けた。

森田君は先日己れの家へ他行ゆきの着物を着て遣つて來て、

『オイ、君は此麼着物を持つてるかい、これは僕が僕の力で拵へたんだ』

と云つて大島の羽織と伊勢崎の着物を見せびらかした。己れは齒嚙みして口惜しがつた。そして以後帝劇や歌舞伎に許り金を使つてはならぬ、偶には斯樣な形に殘るものを作つて置かねばならぬとッく〳〵思ふた、が思ふた丈けだ。相變らず芝居と云へば誰より一番先きに驅け

付けた。

今その必要が迫まつた、突嗟だつたから森田に數時間の借用を申し込んだ、森田は早速聽き入れた。

己れは其の所謂己れの平生着た事のない着物を着て電車に乘つた。一車の視線が悉く己れの身邊に集注した樣に感じた。大分木綿一枚でひらりて飛び乘りした時とは勝手が違ふ、木綿一枚の男は假令髭が生えてゐるにしろ己れには遙かに身分の低い者の樣に感ぜらた。唯にそれのみにあらず少し儀ない身姿をしてゐる者と隣合はせになるのが、己れの尊嚴を害せらるゝ樣に感じた。己れは其の時は故意と立つた、そして木綿君の前にブラ下てゐる釣革を握つて、無理に見せビラかし

『お前は此麼着物を持つてるかい』

と云ふ顏付して濟まし込んだ。相手は己れの着物を見てから後己れの顏を眺めた、屹度此麼着物を着る樣な人は何麼顏付の人だろうと思ふての發作であろう、己れは少つとも借着らしく見せなかつた、それを眼の前現はすが爲に故意と無雜作に摑んだりして皺を拵へて見せた。

重役は決して己れを輕蔑しなかつた、言葉も極めて叮嚀であつた、木綿であつたら屹度その時使つて呉れた『貴方』は『君』と變化してゐたかも知れない。思へば着物の威力と云ふものも又恐ろしいものだが、一擧兩得と云ふ具合には行かぬ何故ならば從前の樣に勝手に電車に飛乘りする樣な非紳士的な行動を採る譯には行かぬ。何時でも其の着物

を着てゐる間は鹿爪らしく振舞はなくちやならない、かるが故に停留場に於ても人を押退け我れ先きにと電車に焦る譯に行かぬ、須らく鷹揚たれ、それが大島羽織の教へた金言である。

僅か數時間の借用に過ぎなかつたけど何麼にそれが有用に働いたかも知れない、己れは妻に早速新調すべく命じた、妻は遵奉した、仕立屋へは大至急にやつたので、三日間の後己れは己れの所有物たる大島の羽織と伊勢崎で肩身を張る事が出來るやうになつた。

その金は勿論不時の支出であつた、妻は財産が又た減りましたよと注意した、けれども己れは夫れに頓着する丈けの餘裕は無かつた。『買ふ可き物は買はなくつちやならない』と反對に出た。すると妻は『貴

方ばつかし、私にも何か作つて頂戴な』

と、不服らしい裡に哀願を表した。

『不可ない、お前は何でも持つゐる、己れを見い着物が二枚限りだよ、なんと憐れな良人では無いか、だから拵へたんだよ、君の里は大金持だし、己れの家は裸八兵衛だ、だから己れは僕の所有物が君と對等になる迄は一切顧みないから』

と、素氣なく峻拒した、妻は鬼界ケ島の俊寛見たいな頼りのない顔をした。けれども彼女は汝の里は大金持と云れたのに聊か誇りを覺えたんだろうか、それ以上己れに何事も云はなかつた。己れは以後彼女が何か作へてくれと强請だ時には必ず此の方法で押へ付けて遣ろうと

云ふ惡い量見になつた。

あゝ大島の羽織の紳士と濟し込むには並大抵の財産では出來ない。見よそれと對等させる爲め己れは新たに腰卷を作つた、腰卷と云ふものは女ばかりの領分に屬する物だと今の今迄思ふてゐたに。何だか妙に擽ぐつたくて。己れは、

『猿又の方が隨つといゝ』

と云つて之を忌避した、すると妻は聞入れない。

『だつて貴方この衣服を着てお腰卷をしないんですと、熊見たいな其毛脛が隙見されてよ。相當な人は皆麼お腰卷よ。世間知らずなのねえ』

己れは盲從した、そうでないと相當の仲間入が出來ないんだから。

次に又餘儀なく表打ちの下駄を新調、說明する迄もなく疊を打ち付けた樣な下駄を指すのである、之はしたり己れは此麼下駄は親父の履く可き物とのみ心得てゐたが。して見ると己れは何時迄も『あゝ玉盃に花うけて』では無いぞ、とう〳〵表打ちの年齡になつて了つた。之が即ち人世の踏む可き經路かナ。

足袋も亦從來の木綿の紺足袋は『此麼物は山登りの時に丈け入用よ』と云ふ宣告を與へて妻は古行李の隅つこへ拋り付け、新たに繻子の足袋を買ひ求めて來た、そして、『履いて御覽なさい』と云はるゝが儘に己れは脂足を突き込んだ、足袋には光がある。己れは嬉しさうに其處ら步き廻はつた、因果は早くも見舞つて來た、己れが二階から下へおり

るトタンに餘り新らしかつた故であろう、スッテンコロリンと辷つた身體が大きい爲め百雷の一時に落つる樣な音がした、己れは澁面作つてお婆さんの樣に腰をトン〳〵叩いた、妻は驅け付けた。

『ど、どうしたんです！』

『こ、此の足袋は、ぼ、僕には身分、不、不相應だ』

憾めしいぞへ、コレ繻子の足袋どんへ。

更に又日頃愛惜の至らざるなき我が日にやけた鳥打も無殘や矢張對等呼ばりの下に空しく葬られ、眼の飛び出る樣な高い中折の $\frac{6}{7}$ 一二もなく收まされる。序に『衣は肝にいたる』式の袴を踏み躙り仙臺平で乙う氣取つて見た。さア合計だ。

繊物駄袋子袴	
羽着の下足帽の	
島崎打ちの折臺	
大勢子の平	
伊表繻中仙	幾程
計	

之を己れの財產から減して見ると、殆んど零敗の恥辱となる。實に口惜しき限りである。さりながら斯うした風采を整へなくちや車夫から眞の尊敬を受けぬ、君が貴方にならぬ。

之れで己れは兎も角も一かどの睨みの利く男となつた。早速一切を着用して見る、エヘッ、我れと我が身に惚れて來るわい、妻は歩き振り

まで敎へる、從來の樣に濶歩しては金が禿げる、宜しく小股にチョビ〳〵だとさ。

其の日己れは選擧前の代議士の樣に至る所を訪問した。

甲の曰く『君は割合に金があるんだね』

乙の曰く『氣が狂ふたナ』

丙の曰く『男が好いから何を着たつて』

丁の曰く『養子に行つたナ』

戊の曰く『これは〳〵、(額を叩て)ウヘー』

敢て再び僕は云ふ、

電車に飛乘りの出來ぬ身分だよ!!。

歸途、電車にも乘らずテク〳〵歩きながら右顧左顧、

『知つた者に逢ひてなア——。』

◎高名の士

己は或る記者から一新進の畫家に紹介された。未だホンの青年、絣の着物着て無造作に帶を締めてる點なんぞ何うしても書生らしい。そこで心に思ふた。なアに大した繪を書けるんぢやなからうと。

然し天才は何處に窺むか解らないものだからと、己は向ふが叮嚀に出れば出る程此方も下手に出て置いた。だから此の人はなんと優しい氣立の男だらうと思ふて呉れたかも知れぬとその時自分勝手に合點し

て置たい。

場所はステーションであつた、知人を見送りに多くの人が集まつたその際だつたんだ。從つて僅かの間しか會談したのに過ぎぬ。名刺の交換をした儘で其の場は別れて了つたんだ。それで己は其の儘忘れた樣になつてゐた。日の五六日も經つたらう、己は見做れぬ字蹟の一通の手紙を手にした。

『先生の御高名は兼々拜聞し居り一度是非御聲咳に觸れたき心願に候ひし所先日圖らずも御拜顏の榮を得、小生の光榮之に過ぎず無限の歡喜に胸おど〳〵と相成り候。……』

己は眩ぶしい顏を幾度したか了解らない、先生の御高名にヒヤリと

した、先生は一般に使ふものとしても御高名は耳がかゆい、嬉しがらせぢやないかと思ふたが、まんざら惡い氣もせぬ、だから己は幸ひ傍に人がゐなかつたからニッとした。若し人がゐたら『僕を飜弄つてゐやがる』と故意とらしい怒り顏を見せるんだつた。次に小生の光榮之に過ぎずとある、オヤッと思ふて又讀み直したが確かに文句に違ひつこありやしない。己れ見たいなおでんの立喰ひまでする男に逢つたのが光榮なのか知らと考へた。どこまで己れを豪い者の樣に思ふてるのか解らぬ。己の一文一句の反響が遂に光榮之に過ぎずを捉ち得たかと思ふと、何だか吹き出したくて堪らない樣な氣がする。

今後何分共に御指導に與かりたくと最後にあつたので三度己は花嫁

を始めて貫ふ樣な氣持ちなつた。御指導とは擽られる氣がする。成程己は脊も高し髯もあり洋服もセビロを着てゐたから青年の眼から見て『此の男なら御指導に與かりたい位の手紙を書いてもいゝ』と思ふたのかも知れぬ。知らぬが佛、己は家へ歸へると褌一つで仰向になつて箱根の山は天下の……と唱つてゐるんだぜ。

恰度來客があつたので返事出すのもツイ〳〵その儘になつてゐた。二三日經つて己は成る書肆で雜誌を見てゐた時ふと口繪に此の青年の名を署した繪に眼がついた。己は素人だから繪の善惡は解らぬが、素敵だなアと思ふた、彩色の具合と云ひ背景の鹽梅と云ひ筆致の垢ぬけした點と云ひ而かも夫れが自分の好きな山の背景にしてあつたのだか

ら忽ちにして憧憬の想は馳せ、忽ちにして畏敬の念を生じた。云ひ換へれば己の方から御高名と光榮之に過ぎずとを捧げたい樣な氣持ちになつた。

が待て暫し、若し己が今其麼手紙を出そうものなら、己を見絞つて自ら高く止まるかも知れぬ。すると己は己の御高名に甚だ相濟まぬ勘定となる。だから向ふがあゝ云ふ風に出て來たのを幸ひに此方が其の氣になつてゐるに如くはないと思ふたので、如何にも大先生顏して君呼ばゝりした手紙を書いた。

『お手紙有難う、折角研究を怠らざらむことを、今日△△雜誌で見た非常に出來榮えよきに感心したり、我が机上未だ一枚の油繪も見當ら

ず、君のを一枚飾りたいと思ふ。知名の訪客も多き事故君の爲めにより廣告になり便利宜しからむと信ず』

密かに心に叫んで曰く『高名の士は長い手紙を書くものでない！』

折角研究を怠らざらむことをとは天晴れ老師振り。堪忍してくれ決して惡氣があつて書いたんで無いんだから。

知名の訪客所か貧乏世帶に猫一匹訪ねて來ぬわい。無價の油繪を貰はむとするには斯うした技巧でも使はなくちや。又『信ず』とは我れながら噴き出したくなる、全で判檢事の試驗答案見たいだ。

高名の士は今日にも油繪を送つてくるかと指折り數へてゐたが、サッパリ音沙汰がない、彼の青年は己に對して禮を失する行爲に出な

いだらうと思ふがなア。

◎繪ハガキに奉る

己れの妻つたらそりや色が黑い、新婚當座は其麼事を面と向つて云ふと己れを洟紙の樣に捨てゝ了ふかも知れないからと思ふ氣遣ひがあつたので云はなかつたが、此の頃はお互に遠慮が無くなつた故か、己れは遺憾なく所信を吐露する。

『ねえ君枝、僕は今まで良心を隱して云はなかつたが、赤裸々に云ふと君は全く色が黑いよ。』

妻は蛇が尾を引張られた樣な顏をした、

『えゝ妾の黒いのは今更ぢやなくてよ、源を印度のアマゾン川から延いてるかも知れませんから。……貴方だつて自慢なさる程の縹緻ぢやなくてよ、世にあり餘る程居るわ、現に今朝來た新聞配達なんかずッと好かづたわ』

と、きた。妻は自分が攻撃せられると、必ずそのシッペイ返しを報いねば承知の出來ぬ女だ、だから妻を攻撃すれば所謂自分を攻撃するのと同樣になつて來る。それをさへ決死の覺悟すりや何んでもない。

『繰返へして云ふが、お前のお腹の子供は己れに似てくれるといゝだがなア、でないと浮ぶ瀬がない』

と、己れは妻の黒さの遺傳を氣遣ふ餘り、思はず知らず呟いた。己れ

の此の高い鼻とキリ、ッとした眉毛が子供にも與へられたら、『汝も人の子』の價値があると思ふた。

『妾を黒い黒いと仰しやるけど、貴方は御自分を白いと思ふて被居るんですか、自惚と何やらはね、アラ御免なさい』

『常識を以つて物を云ふがよい、男は色の黒いものだ、厭に諷刺こするもンぢやない』

と、一寸四角面した、妻は形勢不隱と見たか又は己れの理論を正當と思ふたか、黒い話だけは立消えにして、今度は鋒を代へ、

『貴方に似たら屹度舌の短かい脂つ氣の多い子が出産るでせうね、毎日の頭の白脂の洗濯でも並大低ぢやないわ。それに何よりスタイルの

悪いのが氣に入らないわ、改正を施せば聊か認む可き點があるかも知れないけど』

『急に面白く無くなつた。お菓子でも喰ひたいなア』

『まア話を變へなくて一通りお聽きなさい、この子幸にして妾に似て御覽なさい、色こそ黒けれ滴る如き愛嬌と、漆黒の如き黒髪は』

『ハ、ハークレヨン』

『靜かに聽いてたべ、そして』

『黒き女よ、アマゾンの河流れよ、汝傲ぶること勿れ』

『を丶全智全能の神よ願くは』

『わが妻を誡しめたまへ』

『あら厭よ、妾が云はふとした文句よ、そこの妻とあるのを良人に交換なさい』

『馬鹿云へ、神に二言ある可からず』

『主よ願くは良人の專横を憤らせたまへ』

『主よ、女に贔負すれ勿れ、滴たる愛嬌にビクともする勿れ、さらば我れ繪葉書として机に仰ぎ奉らむ』

妻はとう〳〵我を折つて妾どうしても貴方には協はないわと白旗を掲げた、繪はがきの警句に羽向ふ勇氣が出ないと云ふ原因で。

此の話は之れで一先づ幕が下りた。番茶で咽喉を濕ほした後で妻の曰く、

『妾今日隣家の奥様と一緒に外へ出た時足が竦んで前へ進まなかつたわ』

『何故？どうして』

『だつてお隣家さんはお召の着物だのに妾は銘仙だつたんですもの』

『着物なんか何うだつて顔さへ隣家よりヨリ多く自信があつたら平氣ぢやないか』

『いゝえ、女て其麽者ぢやなくてよ、眞實に今日ほど切ない思ひをして歩いた事てないわ、蝙蝠傘で顔を隠くして通つたわ。貴方よく御聽きなさい此處が『女は虚榮の權化なり』の定義ですよ、其處で妾も女に生れた甲斐にあゝ妾も彼麽着物を着たいと思ふんです』

『碌な事思ふなッ』

『だつて思ふんですもの、あゝ云ふお召にあゝ云ふ指輪と煎じて來ると堪らなくなるんです、で身分不相應な事をしやうと焦るもンですから、假令三度の飯を三日に一度にしてもと』

『こーれ待て、途方もない』

『だつて其處が女の人情ですもの、貴方察して下さらなくつて？』

『あゝ己れは干乾になる！』

許せ妻、己れを瘠こけた鹽鱈にするな。

◎夜中の騒動

奥歯に物を挾んだ様な空模様である。降るんだらうか、晴れるんだらうか。孰方にでも轉ろがつて貰ひたいと思ふてると、ザーッと驟て車軸を顚覆す様な大雨が横様に吹き付けた。それは夜の十一時頃の光景である。

僕は床敷き伸べた。外の物凄さを他所にして夢を貪らうとしたが、兎もすれば窓打つ音に醒まされたけど晝の疲れで何時の間にやらグッスリ。

ひやりとする、何だらうと思ひつゝも又うつ〳〵。

ひやりとする、今度は稍生氣に復した。そしてヂッと考へ込んだ。

何だか足の邊がしつとりしてゐる、のみならず微かに殆んど聽き取

れぬ程小さい音がする、ぽとーん、ぽとん、ぽとーん。

はて?!

がばつと僕は刎ね起きた、そして暗い中で手探くつて夜具の彼方此方を擦つて見た。果して見附けた、しつとり水に浸した様な濡れた部分を。おッ此處も、あッ此處もと僕の手は不快な氣持ちの下に動いたぶるッと思はず身震ひした、貴重なる一票と許り冷たい滴の一つが案内もせずに襟首へ落ちたからである。皮肉な雨の惡戯である。

『起きないか、オイ』

と、僕は一大事件が突發した様に妻を呼び醒ました。

『ウーン、』

と、寢返りと打たふとする。

『大變だよ、雨で夜具が代無しぢやないか、起きろつてたら』

『ねむいー』

一通りの手段では駄目だわい、

『オイつてたら、お前の着物がびつしよりだよ、行李の上へ瀧の樣な雨だと云ふのに』

妻は『え?』と聽き直すと同時に二階から放つた猫の如く早く身を轉して起き上がつた。

『どこに、どこに』

『赤んべー、だけどソラ茲へ手を當てゝ見ろ、雨が漏つたと云ふ事は

事實だらう』

『妾吃驚しちやつたわ、だけど若しや私の着物に異狀が無かつたか知ら一寸診察して見ませう』

と、云ひつゝ押入れを開けて行李の脈を診、

『之で命が延びました』

と、安堵の胸を撫で下ろし、

『貴方其の儘放擲つて置きなさいナ、雨は最早やぐ(夜具)でせう』

とは、即意巧妙。僕だつて負けやしない。

『眞實に己れは錄に寢もせず凝りゝ(行李々々)した!』

なんと傑作だらう。

雨は傑作に感心もせず相も變らず吹き荒んでゐる。

◎飛んだ誤意見

今日も平常の通りK裁判官の家へ遊びに出掛けた、夫婦二人に眞に花の様な娘一人の生活。家の中は常に談笑に包まれてる様な靄々たる家庭、曇つた顔とて交際して六年此の方ッイぞ見たこともない。それが何うした事か今日の奥様の顔と云ひ娘さんの容貌と云ひ何だか變だ常ならば『まアよくこそ西川さん』とイッ〳〵されるんだが、今日のはそうぢやない。

『西川さん困つた事が出來ましてね』

と、奥様の打ちしほれた聲。

『どうかなさいましたか？』

と、己れの方が却つて尋ねたから眉を密めて訊いた。

『何分妙齢の娘がありますと様々な誘惑がありますもンですね、時々名も知れぬ人から怪しな手紙を之れ迄隨分くれましたが、別に心に留めませんでしたが、今日のは大分強いのです。まア之を御覽なさい』

と抽出から出して渡されたのを讀んで見ると、それは猛烈な凄文句、

『私と交際して下さらないならば七度び死んで七度び生れて貴娘に執念を持ちます』とか『毎日附け覗つてゐるのだから若し返事をくれなかつたら立ち所に其の復讐をする』と書いてそして其の上立派に住所

姓名番地まで認めてあつた。

『奥様一層御主人にお告げになつて警察の手を煩らはしては』

『もう主人の耳に入りますと、大袈裟になつて世間へバッと擴がるかも知れません、それを餘り好みませんから何んとか方法が無いかと先刻から考へてゐたんですが、西川さん貴方どうか本人の家へ參つて意見して下さいませんか、そして事なく納ればこんな結構な事はありませんから』

『宜しい承知しました、私は未だ他人に意見した事がないので、子供はあつても何だかまだ親父になつた様な氣がしませんから、堂々大に説服して遣りませう』

と、己れは今日と云ふ今日こそ他人を意見するのだと胸をワク〳〵させて喜んだ。意見と云ふものはともすれば我が子に向つて最初封切りせられるのが定則だけど、己れの子供は何分僅か一歳だもの、意見してもしなくてもフギャア〳〵ぢや張合ひも何もありやしない。己れは自分で相當の年になつてる事を認めてるんだけど、世間體へは何うだかなア。その試金石が恰もよし茲に到來したと云ふものだ。駄目だつたら多年蘊蓄した此の髯はチョン切つて了ふと偉大なる決心をした。云はゞ一かどの主人になつたと誰れしも認めて呉れるか認めないかの瀬戸際だ。夢々後れを取る勿れ。

己れは威嚴を保つ爲めに車に乘つた、そして夫の男の家を目掛けた

大方住所は僞稱してあるだらうと思ふてたが、實際あつた、姓も同じい。車の梶棒を下ろさして己れは車夫に『お客様ですぞ』と云つてくれと命じた。そうでないと賃錢を拂ふと同時に直ぐスタ〳〵車夫が去つて了へば車に乘つて來たことが何んの利益功能も無くなるからだ。

車夫は己れの命令を遵奉した。最初の遵奉聲は通じなかつたらしい二度目の遵奉聲で始めて奥から女の聲が洩れた。敷居が開いた、御辭儀した。もう車夫には用がない。

『私は斯ういふ者ですが』

と、一應挨拶の後名刺を出して、

『お宅の義雄と云ふ方に御面會を願ひたいんですが』と、口切つた。

女は三十二三位の年だつた、若し五十以上の年齡に見えたら『お宅の息子さんに逢ひたいのですが』と出るんだつたけど、何分相手の年齡がハツキリしないのだから仕方なしに手紙にあつた名を用ゐたんだ。すると妙な顏して己れを眺め、同時に風采の卑しからぬに對する畏敬の眼を以つて、

『只今留守で御座いますが、何の御用で御座いますか』

『ハア、是非お目に掛りたいのですが』

『そうですか、それではツイ近所まで行つてゐるんですから一寸一走り呼んで參ります。濟みませんが、這入つて暫らくお待ち下さいませんか』

『ハア、成る可くお早くお願ひ致します』

女は初對面の己れに留守を預けても構はぬと思ふた程、己れは信用を博したらしい。それと云ふのも己れの顔の品位と髯とが預つて力ありと思つたので、己れは取敢へず口髯を捻つて髯に敬意を表して置いた。

煙草を燻らしながら暫らく待つてゐると、廳てドヤ〳〵と下駄の音がした。

『どうも濟みませんでした』

と女の御辭儀に應へた首を擡げて見て、オヤッと己れは驚いて了つた。

己れは先刻からその男と云ふのは少くも二十二三の年齢だらうと思ふてゐた、或はヒョッとすれば若くて二十位だと見當を附けてゐた。然るに意外！これは〳〵。

どう見たつて十四か十五歳位にしか思はれぬ坊助だ、まだお伽話が面白くて舌切雀の香りが殘つてゐる年齢頃だ。此の坊助があんな手紙を書いたのかと、暫し呆然として開いた口が塞がらない。七度び死ぬの活きるのと何處で覺えたのか疑はしい位。況んや娘に手紙を寄越すなど、此の鼻ッ垂らしめが!!

『君は義雄と云ふんですか』

『ハア』

如何にも生意氣に讐くハアだ。胸糞が惡い程落着いた返事振り。女はヂッと耳を濟ましてゐる。◎れは徐ろに懷中を探ぐつた、そしてやをら手紙を出して咳一咳、

『君は之を覺えてゐるだらうナ』

何氣なく見下ろした眼！ハッとしたらしい、彼れの眼は己れの顏色を窺み、女の顏色をかすめた。周章狼狽、恐怖失望、みる〳〵青瓢簞の様に色を代へた。

『……』

『君返事したらいゝでせう』

『……』

『一寸お伺ひ致しますが、此の子が何か無調法でも致しましたか』

『貴女のお子さんですか』

『一人しかない子で』

『へーイ』と己れは又吃驚した、よもや此の若い女が此の大きな子供の母とは今の今まで。

『實子で御座いますか』

『ハイ、之れの父は先年亡くなりましたので、私一人で育てゝ居りますので』

『それはお骨折りの事で』

と、己れは先づ人並みに同情の口吻を洩らし、

『譯を申さぬと解りませんが、實は私の親類に令嬢がゐるんですが、其處へ貴女のお子さんが、なんと申してよいか云はゞ手紙を寄越したんでね、それで先方の驚きつたら夫りやひどいのです』

『手紙と申しますと、なんで御座いますかいたづらごとでも書いた？』

『え、そうです、若い男女に有勝ちな』

『まア此の子が』と、ハラ〳〵と涙を落し、

『これ義雄、お前はまアなんとした事をするんです、お父さんが亡くなられてから此の母が何麼に苦勞をし、何麼に血の脂を流して今まで斯うして來たか。せめて一人前の人間にして人に後指されまいと育

てた此の親の心も汲まず、よくも其麼大それた事を』と、ヨ、ヨと悲しみ、萬斛の涙を拭いで己れに手をつき、

『どうぞお許しなさいまして下さい、皆麼此の母の育て方が惡かつたのですから』と、又も咽ぶ。子供は默つて俯むいてゐる。

そこで己れだ、之からの一言一句が髯をチョン切るか切らぬの重大問題の掛つてゐるのみならず意見を吐くに足る可き貫目が附いてるか何うかの試金石だから極めて大事をとつて、吸ひたての煙草をチョックラ灰に挿み、

『さぞ御愁傷の事と存じます』

と、母親に改めて同情らしく聞える樣な聲を出し、今度は息子の方へ

向つて居住を正し、

『君、よく胸に手を當てゝ考へて見たまへ、前途遼遠の身體を持つてゐながら此の有樣はなんと云ふ情けない事だ』

斯う構へて先づ一矢を放ち、

『君等はたゞ自分の學ぶ可きを學び、師の敎へに從ひ、親に孝を盡す可き最も大切なる場合ではないか』

と、道學者口吻を眞似て、尤らしく述べ、

『殊に君等の樣な子供はまだ内で御伽噺でも讀んで昔々を憧憬てゐる時ではないか、それを七度び何うの斯うのと楠正成ぢやあるまいし、其麼コマシャクれた事は云ふもンぢやない、自分の年齢を考へて見ろ』

と、針を刺す樣な痛い言葉を連發し、今からが本舞臺とばかり熱辨滔々、

『君、己れは多くを云はぬ、だけど君今お母さんから聞けばお母さん一人で君を此れ程迄に育てたてんぢやないか。その親の斷腸を絞る行爲を仕出かすとは何たることか。ア、老ひ先き短き母の心を慰めるのは子として第一の務めではないか。君は老ひ先き短かき母をなんと思ふか。老ひ先き短かき母をいたわり慰めてこそ、出世の光明を認める第一歩ではないか』

と、己れは活ける大聖みたいな訓戒をした、息子は感激に堪えやらぬ風情で堅く首を垂れてゐる。然るに母親は何んだか不服らしい詰らぬ

様な顔つきだ、己れが此麼に迄して息子の惡癖を矯めやうとして懸河の辨を振つてるのに、少しも有難味を察せぬのか知ら。

稍、あつて母親は己れの説教の途絶の頃を見計らひ、

『此れ義雄、今の御言葉がようく腑に落ちましたか、性根を入れ換へますか』

と、たしなめる様な哀音を傳へると、

『わ、解りました、お母様許して下さい、僕が惡う御座いました、以後決して御心配は掛けません』

と、眞に悔悟の様子。

『此の方に心から御詫びなさい』

何だか氣極りの惡そうな風だつたが、

『どうか勘忍して下さい、決して彼麼事は致しませんから』と、手を附いて平身の様。

『過ちを改むるに憚る勿れと古人が云ふてるから君が眞に誓ふならば私は敢て追究せぬが、最後に重ねて云ふて置くが老ひ先きの短かい母を想はなくちやならんぞ』

己れが老ひ先きの短かいと云ふと母親は妙な顔をして眼をパチ〳〵させる、その原因は那邊にあるのか解らなかつた。

ともあれ己れは見事意見試驗に通過した、その證據には二人共を泣かす事が出來たから。辯を以つて人を泣かすには辯者にそれ丈の至誠

があつたからだ。換言すれば己れには至誠ほとばしるものがあつたんだぞ。

大成功の裡に己れは飽く迄も意見者らしい體面を保つて其の家を辭した。その足で早速K家を訪ね、一件を詳しく語つた後で、

『然し奥様、どうも變でしたよ、私が最上の警句たる老ひ先きの短かい。親を〳〵と口出す度に其のお母さん妙な顏をしてましたよ』

奥様腹を抱えて、

『そりや貴方其麼慘酷な事を仰しやるからですよ』

『何が慘酷なんです？』

『だつてそうでせう、母親と云ふのが卅二三てんぢやありませんか、

女の盛りも盛り眞盛りですよ。その人を捉へて老ひ先きの短かいなど〳〵仰しやるんもンだから誰れだつて氣が面白くありませんとも！働き盛りの花盛りぢやありませんか』

『道理で赤ン坊に唐辛を嘗めさした様な變てこな顏をしてゐたつけ』

『そうですとも、私だつて怒りますわ、當り前ですもの』

母と云へば己れは直ぐ齡五十程度の人を想像してゐたから此麼失敗をしたんだ。以後は氣を附けなくちやならん。誠に相濟まぬ事を申し續けて來たものだ。

屹度その老ひ先き短かい母は己れが歸つた後で早速座敷中に鹽を蒔き、慌てゝ鏡の前へ飛んで行つて、

『老ひ先きの短かい〳〵など、一體顏に皺でも出て來たのか知ら、白髮でも若しや』

と、御念入りの事と思ふと氣の毒の想ひ彌增して今度は己れの方から

『以後必ず注意致しますから』

と、平身叩頭ものらしい、ハテ氣極りの惡い。

◎珍らしい戀（傳聞）

己れは之でも珍らしい戀をした事がある、何しろ相手が英國人の父と日本人の母から出產た混赤兒令孃で然かもそれは年が十八、花の如き顏で純白の洋裝ときてゐるから、アイラブユーには持つて來いと云

ふ代物だ。

己れと至極懇意にしてゐた某高等學校にAと云ふ敎授がゐた。或日例の如く遊びに行くと、机の上についぞ見馴れぬ令孃の寫眞を飾つてある。何氣なく手に取つて見ると、實に一點の難の打ち所のない西洋娘だ、眼と云ひ鼻と云ひ口と云ひ此麼美人は此の世に生存してゐるのかと怪しまれる位。己れは次第々々に頰にほてりを覺える樣に感じたつまり一口に云へば『男と生れた甲斐に』と思ふたのである。

恰度其の時A君は留守だつたので、己れは妻君に向つて斯う訊ねた。

『奧樣、これは誰れです？』

『オヤ目につきましたか、寫眞の裏に何か書いてありませんか』

『あゝ然うですか』

と、再び手にして見ると、英文で『妾の日本に於ける忘れやらぬA先生へ、スマトラ、ラングカットにてメリより』とある。

『ぢや以前生徒だつたんですね、學校は？』

『麻布の△△です、』

『何んと云ふ可愛いゝ娘さんでせう、ねえ奥様貴女も然う思ひませんか』

『奇麗な方でせう、まだ寫眞が澤山ありますからお目に掛けませうか』

『どうぞ願ひます』

奥様は立上がつて押入れから寫眞箱を取り出し、その中を切りに探してゐて漸く三枚を選び出し、

『これ御覽なさい、同じ人ですよ』

僕は重い唾をぐッと呑んで微かな胸の轟きを強いて抑へながら、受取つて眸を輝かした、一枚はニッと微笑でゐるので、一枚は又今から散歩に出掛けようとする輕い扮装で、最後に手に殘つたのはベンチに腰を下ろして詩集を繙いてゐる斜め姿であつた。決して己れは贔負で云ふんぢやないが小野の小町も楊貴妃も云ふ眞實に相濟まぬ心理狀態になつた、此の事が先祖に知れたら己れは立所に獄門に遭はされたかも知れぬ、異國の娘さんにボーッと上氣するなどゝは不埒千萬と云ふ

憤怒の基で。戀に上下なし外國なしと云ふ事は其の時始めて僕は知った、僕は確かに月を見て物こそ思への氣持ちになつた。

己れは再び書齋に戻つて机にグタリと倚れた。愈々本物らしくなつた。心臓が八百屋お七の心臓を一寸拜借した樣にドキン〳〵するんだもの。スマトラ！　虎と鰐ばかりゐて黑ン坊の巢窟の樣に思ふてたらウフそこに此麼メリーさんが住んでゐるんぢやないか、メリーさん貴嬢に此の胸の響が聞えませんか、あゝ己れはお七ぢやないが早鐘があると亂打いて見せるんだにな？。

と、想は想を生んで、それからそれへと走る。搔き亂れた頭腦は何氣なく擡げられ、眼は無心に動いた。何日來て見ても同じい書棚の金文

字、見るともなしに見て、フと兩眼はピタリと一物に灑かれたかと思ふと、不動の姿勢を保つたかの樣に暫らくはピクッともしなかつた。

手紙！　白い四角な手紙!!　正しくペンの走り優しき英字の表書。素破ッと渴したる旅人の水を求むるが如く、取る手遲しと見ればあゝ紛れもなきメリーさん。

『先生、私は今表記の箇所にゐます、伯父と二人で。私は時々伯父に日本の話を聽かして喜ばしてゐます。指折つて數へて見れば早やお別れしてから三年にもなりますね。

先生、貴方は屹度私を樂ましめ微笑しめる手紙を下さるでせう、私は日本を想ふ度に先生を想ひ、先生を想ふ度に日本を憧憬ます。先生

貴方は今度私に逢つたら何うして下さいます？　私は信じます、この手を抱へて娘の如く彼方此方の散策に共として下さるだらうと。何日でせう先生にお目に掛かるの日は？　我々は神の命ずる所に從はねばなりません。先生及び奥様の祝福を祈りて、

愛せられたるメリーより

己れは一寸ばかりメリー許りが女かいと思ふた。何故ならば此の手紙を讀んで見ると、どうもA君とメリーと懇ろな仲になつてるんぢや無いかと。然し直ちに其の忌む可き邪推は雲の如くに除かれた、次の理由で。

『其麼事があるもンか、先生と生徒ぢやないか！』

己れは又直ちに『愛するメリーさん、戀しいメリーさん、命に變へ難いメリーさん』と云ふ舊態に復した。それが三合四合ととう〳〵富士の金明水まで達したかと思ふ程昇上した。洵に想ひや彌增さるの感慨に打たれた。

いつ迄も感慨に打たれて許りゐると眠くなる、己れは素早くメリーさんの住所をノートに書き認めた。そして素知らぬ顔して其の手紙を書棚の舊位置に復した。途端に奥様が遣つて來て、

『川田さん、何を呆然してるんです、何か仔細があるんですか。』

あるとも、あるとも。

A君が聽て歸つて來た、妻君と僕との三人は普通の如く雜談に耽け

つた。其の時妻君が『メリーさんの寫眞を悉皆川田さんに見せました
よ』と云ひ出したのが始まりで話はメリーさんに移つた。僕は務めて
平氣を裝ひ、第三者見たいに冷靜を保つてゐた。
『川田君は幾歳だい？』
僕は直ちに答へた。すると、
『メリーは今十八だから恰度い〻年配だ、結婚したら何うだらう？』
と、A君は眞顏らしく戯談らしく妻君の顏を見ながら云つた。
『そうねえ』
と、妻君はそれ以上は云はなかつた。相手に不足だと云ふのか、べら
んめえ尻捲るぞ。

『西洋人と一緒に暮すとなると高價くつきますよ、夫れが一寸ねえ、
どうだかと思ひますわ』
夫君は大きく頷いて、
『全くそうだ、西洋人は贅澤だから遣り切れないよ』
其麼失望させる位だつたら始つから結婚など〻僕の胸をドキン〳〵
させ無ければい〻のにさ。顏こそ羞恥の赤さを隱したれ、胸の中は熱
した林檎の皮の樣に燃え立つてるんだぜ。
『日本語は出來ないでせうか』
『小さい時に母親に死別れて、父親の手に育つてだから、英語ばかり
だ、然し獨逸語も上手いもンだ』

と、云ひつゝ何か思ひ立つたと見えて、又A君の特長とする大きな頷づきを見せて、

『一層英語の家庭教師にしたら、そうすりや妻の費用丈けは出來るだらう』

ウムそれがいゝと僕は我が意を得たと許り罷り出ようとしたが、慌てゝ『待て暫し』と無理に焦る心を引止めた。歴史にや無いけど輕卒しては碌な事てありやしないから。

『ねえ、お前は何う思ふ?』

と、A君は妻君を覗いた。間一髪の時しもあれや一匹の邪魔者がッ。

『父様、母様只今ッ、今日學校で先生がね』

と、一郎君が息セキ巻き鞄擔いだ儘斯う云つて坐り込んだかと思ふと

『かアさん何か頂戴』

『まア此の子は直ぐあゝだから、子供てねえ』

と、云ひながら妻君は立ち上がる。A君は又一粒の我が慈みの子が歸つて來たものだから、嬉しそうに雙頰を崩して、僕の爲めには一生の安危に係はる重大事件たるリメー問題を悉皆忘れて了つて、

『坊や、學校の先生が何う?』

僕は癪に障つてコヽナ邪魔坊の頭をテーブルの縁に叩いて遣らふかと思ふた程憾しかつた。

聽て僕は秋の近づいた蜩の様な淋しい聲音を發して『左様なら』と

云つて、悄々家路を辿つた。

彼れ（即ち己れの事だ）は驚く可き勇猛心を起して其の晩メリーさんに宛てゝ左の如き手紙を認めた、勿論英文の事たるは云はずも知れた事。

『親愛なるメリー嬢よ、貴嬢は私の何たるやをサッパリ御存知ないかも知れぬけど、私は貴嬢をチャンと知つてるんです。何故かと申すと私は毎日の様にAさんの宅へ遊びに行つてゐる、だから彼家の淑女並びに紳士諸君（諸君の内に一郎坊やを含む）と兄弟の様に話をする。斯う申せば私が貴嬢を知つたの原因は云はずとも解るでせう。

メリーさん、今日も私はAさんの宅へ遊びに行きました、所がAさ

ん及び奥様は私に貴方はメリーさんと結婚なすつたら如何ですと戯ひました。メリーさん私は其の言葉が戯談で無いのを冀ふ者であります貴嬢も私と同感を持つ可く有せぬか。

メリーさん私は何か知らず貴嬢の御寫眞を見たら胸が早鐘の如くなりました。そう〳〵西洋にも矢張り鐘がありますか、火事があるとヂャン〳〵鳴らす、つまり平靜を破る音響と註釋したらいゝでせうナ。何故私の胸は早鐘になつたんでせう？ 親愛なるメリー嬢よ、神の恵みの下に直ぐ了解せられむ事をお望み申す。

親愛なるメリー嬢よ、貴嬢はAさんに其の蠟の如き白きおん指もて手紙を認めらるゝが如く、貴嬢は私の爲めにも認め下さることを信じ

ます。私は時々貴嬢に日本に起つた興味ある事柄に就いて御報らせするの勞を取る事は茲に神に誓つて置きます。

メリーさん、私は今も貴嬢の寫眞を見て歸つた許りなのです、貴嬢は眞實にばらの樣に美しい、鳩の樣に可愛い、此の事は御世辭でない事を再び神に誓つて置きます。

さらば花の如きメリーさん、グードバイ、貴嬢の祝福を祈りて、

T K より

手紙は到頭ポストの大口へ落ちて了つた。最早慌てようが泣かうが叫めかうが厭でも應でもメリーさんの手へ入らなくちや承知せぬ。ほつと重荷を下した樣になつて、始めて冷靜に立ち返り考へてゐると、

厚顏しいやら恥かしいやらで流石に顏にほてりを覺えない譯には行かぬ。若し假令メリーさんが受取つて讀み下だしてムウと怒つたとしても近所隣へ知れる氣遣ひが無いから大丈夫だ、スマトラだもの。誰れが此の僕がメリーさんに戀ろな手紙を送つたなどゝ知るもンか。

それから月日は矢張り人並みに長い思ひがした、恰度二月以上も過ぎたかと思ふ頃、僕は期待してゐなかつた樣なメリーさんの手紙を受取つたからまんざら捨てたものでも無い。

『T、Kさん、妾は貴方から手紙を貰つた事を非常に喜びます。私は櫻咲く國に一人の新たなる友達を得たと云ふ事に就き神に感謝を捧ぐ可くもつ。妾はホンに日本好きよ、櫻が咲いたり梅が香つたりするんで

もの。

T、Kさん、妾の事は十分Aさんから聽きになつたらうと想像致します、私はそれ丈けでも嬉しゆ存じます。以後共に宜しく。

さてT、Kさん、妾は先般Aさんに宛て一個の贈物を出しました、その中には菓子もあれば鑵詰も其他色んな物があります。貴方は屹度その分配を受けられるだらうと思ひます、私は寧ろ受けられむ事を祈つて止まない次第であります。

神の祝福を御身に祈りて

己れは幾度も〳〵繰り返へし讀み返へしたけど其處には戀と云ふ一

メリー

字をも發見する事の出來なかつた事を悲しむ可くもつ。よし假令戀と云ふ文字の入らなかつたにしろ、之に相當する何か情味のある云はゞ玩味を與へて呉れる丈けの代名詞でも御情けでも宜かつたから書いてくれたら好かりそうなものだつたのに。

櫻咲く國の己れはメリーさんの事を薔薇の樣に美しいと書いて見たり、又胸が早鐘の如くなつたと迄云つて其れとはなしに小當りして見たんだぜ。それだのに何と云ふ呆氣のない手紙だらう、己れを菓子なんかで脇道へ釣らうなどゝ、其麽甘い手には乘らないよ。

西洋には男女七歳などゝ云ふ窮屈な手合は無い筈だから、思ひ切り惻々の情を訴へて呉れたつて宜さそうなものだに。

濟まして見せてるんだナ、そうだらう、だつて活動寫眞の西洋娘は十人が十人まで直ぐ色目を使ふよ。己れをメリーさんは未だ見ぬから其麼に想はないかも知れぬけど、そりや男振りに掛けては自分の口から云ふも何だけど、櫻咲く國でも逸品の部だぜ、寫眞を御覽に入れようか。

更に手紙を認め出して其れが可能性を有するか否かと云ふ事に就いては兩三日間の熟慮を要すると思ふて、僕は直ちにペンを取らなかつた。

其の晩だつた、例の如くA君の内へ遊びに行つたのは、A君には勿論メリーさんに手紙を出したなどゝ、憶氣にも云つて無かつたのである

『あゝ川田君か、實は君を待つてたんだよ』

と、常にない云ひ振り。胸に覺えがあるから急所を抉られた樣にぎくりとする。それでも全く他の事かも知れぬと、心を大きく持つて、

『何んでしたか？』

『君、メリーに手紙を遣つたんだね』

素破、

『えゝ、出しました』

今更になつて後へ退く事も出來ない、屹度相手に確つかとした事を摑んだからに違ひない。

『何う云つて遣つた？』

『なアに、こッと、隨分以前ですから、何んと書いたらう？』
と、云ひながら僕は逸早く當らずの障らずの文句を其の間に浮び出そうと焦つた。
『あ、そう〳〵、そうだつた。私はAさんの宅を自分の家の樣にしてるから、お暇あらば私にも手紙を下さい、私も亦變つた事は御報しませうと其れ丈けでした』
『フーン？』
まだ他にあるだらうと疑ふ樣なフーンだ、正直に云へば御尤なフーンだ。
『それッ限り？』

『えゝ』
己れは自己の云分をヴエルダン要塞の佛蘭西兵の如く死守した。
『それに返事があつたかい？』
『ありましたよ、Aさんに贈物を送つたから、貴方は必ずその分配を受けなさいつて』
『はゝはゝは、虫が好いなアー、』
と、高らかに笑つて、ぐるりッと隣室に首丈け向き、
『オイ、今朝の小包を玆へ』
『はい』
と、妻君の答へがしたかと思ふと、軈て兩手に餘る品を運んで出て、

下に置き、

『外國の物ですから珍らしい物ばかり』

と、云ひつゝ包みを開き。

『御覽なさい、綺麗でせう？』

成程メリーさんからあつた通り菓子に罐詰、それに罐詰の香水と外國の繪本、これは妻君と一郎坊宛てらしい。

己れは奥歯に物が狹まれてる樣な氣持ちで甘い樣な酢い樣な菓子を嚙んだ。考へて見ると如何にも己れの味はつた戀によく似た味がする。矢つ張り櫻咲く國の男はムスメに戀した方が手つ取り早くて埒が早い。虎の住むスマトラまで手を延ばすと直ぐ此の通り嚙まれるぞ、嚙

まれるぞ。（此の話傳聞）

◎殿樣の落第

上田君は又高等文官試驗に失敗して了つた。去年己れが彌生町に住んでゐた時上田君もツイ近所に居を構へてゐた、その時分上田君は文官試驗を受ける準備に忙殺されてゐた。上田君と僕とは小さい時からの友人で、而かも同じく學校を卒業したんだから、僕の力の入れようも他の者と違つて並大抵ぢやなかつた。毎日歸つた頃を見計ひ、勉强の邪魔になると不可ないからと僅か十分間宛位訪ねそは樣子を聽きもし、督勵の言葉も與へておいた、そして稍もすれば絶望の聲を上げて

中途で止めようとするのを強いて力をつけてゐた。そのお蔭で筆記試驗には見事に合格した。やれ嬉しやと自分のことの樣に喜んで、時には青木堂から態々チョコレートを買つて來て遣つたりしたものだ。上田君之れに悉皆感激して今度若し合格したら自働車で箱根温泉を奢ると堅い約束、イヤ決して其麼心配は入らないと云つたものゝ己れだつて之に勇氣を得たので益々皷舞し、箱根の幽境に散策するのも近い裡と上田君以上に合格を祈つてゐた。そして毎日口答試驗から歸つて來るのを待ち受けては何うだつた〳〵と浴せかけた、上田君その度に今日は好かつたとか或は今日は殆んど山が適中つたとか、筆記試驗さへ通りや口答なんかお茶の子だと大きく收まつてゐるもンだから、それ

ぢや最早箱根は締めたものだと上田君と共に唯發表の日をのみ數へて待つてゐた。そして長い間の奮鬪の慰勞だなど云つて朝にバウリスタ夕に何處と浮かれてゐた。

所が發表當日上田君は『宜いと云ふ事は解つてゐるけど』と呟きつゝ出掛けて行つた、僕も九分九厘合格と定めておいて、一旦自宅へ歸り或る用事を濟ませて、そこで箱根へ行くには輕い鳥打を被つて行かなくちやと本鄕の板屋へ目掛けた、その途中一高の横でピタリと上田君に出會つた。

『オイ、何うだつた?』

と、成功と知りつゝも思はず聲をかけた。上田君その時形容の出來な

い苦笑と一緒に頭へ手を載せて『駄目だつた』と務めて元氣を裝ふて大きな聲で云ふたが、何んだかそれにシメリがあつた。

『え？　本當かい？』

と、己れも顏が變つた、と同時に箱根も駄目だ哩と鳥打は其の儘沙汰止みにして了つた。

上田君は何うしても其の年合格しなくちや成らない身體なのだ、何故ならば彼は其の六月徵兵に合格してゐたんだ、で若し文官試驗に落第すると翌年は右の事情で止め、その翌年は隊から出て間も無いからそれも望み無しでそれ以後としたら頭腦がボケて了つてゐて永久に立つ瀨が先づ無いものと己れは認めてゐた、上田君も矢張り其の考へで

あつたらしい。

が然し今更悔んだつて仕方がない、潔よく兵役を濟まして再び英氣を養つて受驗るに如くはないと己れは慰める言葉が無かつたから、そう云ふ風に云つておいた。

その裡彼は愈々入營の爲めに故鄕に去つて了つた、何も運命だと己れは餘り云はなかつた、唯彼れ一個人の爲めに不幸だつたと大に同情して居つた。何日しか二人の音信は途絕へて了つた。

所が今年に入つて僕は緊要な用件を帶びて下阪した、その際計らずも大阪市內の電車の中で上田君の伯父に出會つた、その時一體何うしてゐるだらうサッパリ手紙の往復しないんだがと近況を尋ねてみた、

すると伯父は意外な報知を己れの耳に傳へた。

『彼は入營してから間もなく病氣に罹つて長らく病院へ入院してましたが何うもハカ〳〵しく無かつたと見えて到頭この一月に除隊になつて了ひました、病名ですか神經痛です』

『へえ？』

と己れは吃驚した、と直ぐそれぢや今年も矢つ張り受驗るだらう、彼にはいゝ鹽梅だつたと伯父に對してほゝえみを見せて其の儘別れて了つた、そして一度樣子を尋ねなくちや成らないと知りつゝッイ〳〵御無沙汰して居つた。

月日は經過して又も文官試驗の期日が切迫した。一日僕は銀座を散

歩してゐた、すると野村君にひたりと出喰した。野村君も去年失敗して今年は遙々朝鮮くんだりから態々上京して來たんだ。やア〳〵の感歎詞交換の後『僕昨日上田君に出會つたよ』と寢耳に水。

『いゝや其麼筈はない、彼は未だ上京しないだらう、故郷に居る筈だ』と首を横に振ると、今度一家を引纏めて上京してゐるとの話、そして住所も訊いて置いたからと番地まで知らして呉れた。

それならばと己れは早速千駄木町に上田君を訪ねた、折惡しく彼は不在だつたが家族と云つても母丈け、お母さんなら僕は同郷でもありよく遊びに行つたりして知つてゐたもンだから其の儘上がつて、その裡上田君は歸つて來るだらうと世間話やら故郷の話に夢中になつてゐ

たが、フと上田君に今回嫁が決まつたと大變耳よりな知らせ。

漸次聽けば上田君も三十七と云へば男の眞盛りそれに大學は卒業だし、最早世の中へ飛び出るになんの不足もない。母は七十の坂を越してゐるので一刻も早く孫を拵へて安堵させ度いのが腹一杯、上田君よりも寧ろ母の方がヨリ多く嫁を希望してゐた。で豫ねて懇意にしてゐる本村氏に頼んであつた、本村氏は某省の局長であつたから傳手が多かつた、それとなく才色兼備の者を物色してゐたが、遂々白羽の矢は某海軍中將の娘に放たれた。相手も異議なし此方も申分ないと云ふ事に成つた。そこで來春早々式を擧げる事になつて既に結納まで終つて了つたと云ふ。母はそれを聽かせて最後に『此の話の際結婚は人生の

一大事であると云ふので互に愼重に吟味し合つた爲めに見合に五時間も費した』と笑つてた。何時まで經つても上田君は其の日は歸つて來なかつたので僕は本意なく辭して了つた。

それから僕も忙がしさに紛れて暫らく訪ねる事も出來無かつたが恰度試驗も終つて發表を待つてゐると云ふ頃僕は再び上田君を訪問した幸ひ彼は内に居つた、今度の試驗は何うだつたと尋ねると、運だから何うなるかと彼は去年の樣に昂然としてゐなかつた。今年は去年より及第者の部割が少ないなどゝ心細いことも吐いた、そして若し宜かつたら内務省へ、落ちたら久原へでも運動し度いと豫め方針を立てゝあると述べた。

『去年は失敗したんだから今年は大丈夫さ、第一餘裕がウンとあつたらう』

と、僕のみ力味返へつてゐた、お母さんも合格したら第一番に貴方を呼んで赤飯の御馳走しますよなどゝ稍、期待したらしい口振りであつた

僕は君箱根だよと薦める樣な愚を繰り返へさなかつた、彼も云はなかつた、互の胸には箱根などゝ云ふ事が何んとなく陳腐に思はれてゐたから。

フと僕はまだ披いてない朝日新聞に眼が附いた、その日僕は早く出て未だ讀んでゐなかつたものだから、話の途切れを利用してはチョイ〳〵頁を開いた、そして面白そうな題目を拾つて行くうち忽ち呀ッと

思はず叫んだ、高等文官試驗及第者氏名とある。

『おい〳〵發表になつてるよ合格者が』

と、僕は頓狂な聲を出して注意した、總ての視線が一時に集まつた。

『出てる？』

と上田君は別して急に僕の持つてゐた新聞を取上げ樣ともせずに、務めて平氣を裝ふてゐた、母も然うだつた。彼等は胸躍りつゝも萬一を慮つて强ひて自若を衒ふてゐるらしく思はれた。僕はなんだか之等の人の眼のあたりで讀むのが危氣のある樣に思はれたのでッと立上がつて襖明け放しの隣室へゴロリとうつ伏しになつて一字も遍さじと念入りに瞬きもしなかつた。

見當らない！　若しやと再び讀み返した。

『無いんでせう？』

と、母は此麽間の下に僕の口を開かふと誘惑した、僕は默つて二度目の檢閲に餘念無かつた。

『返事のない所を見ると駄目らしい』

と、母は微かな震ひを帶びて何物か求める樣な口調で云つた。上田君は態とらしく高らかに、

『無いんだらう、無けねばいゝぢやないか、奇麗に云ひ給へ、どうせ覺悟してゐるんだから』と、飽きらめた樣なそれでも一縷の望を持つてゐる樣な問ひを發した。己れは妙な笑ひで夫れを紛らして三度眼を通

した。

矢張り無い！　もう何時迄も斯うして居られぬとグイと身體を起すや、

『あゝ』

と僕は淋しい遣る瀬ない感歎詞を作つて、

『なアに平氣だよ、內務省よりか久原と決定し給へ、その方が有望だよ』と僕は落ちたと云はずに此麽風に品を代へて謂ふた。

『然うだらうと思ふてた』

上田君は淋しい笑みを見せた、無頓着な己れは『書齋まで新築して勉强しながら又來年か』と擽ぐつたいのを浴せた、そして務めて暗や

みに沈まふとする空氣を換へ樣とした、然しその心盡しは駄目に終つた。己れには慰める言葉が出なかつた、一座は暫し沈默に入つた。

『此男はいつも筆記試驗は好いんだけど、口が拙くてね』

母は上田君の氣落を繕さうと好意的な解釋を與へた。

『お母さん此の男だつて口は拙手ですよ』

上田君は母の手前僕の手前之はいゝ口實に有り附いたと云ふ氣配が見えた、僕もそれと知つて甘んじて享けた、而已ならず母の心には

『それなら仕方がない』と云ふ絶望の內より强いて飽きらめを見出さす可く努力せねばならぬと思ふたので隙さず、

『全く君にしろ僕にしろ口は拙いねえ、本當に喋べる事の思ふ儘にな

らぬ者はトンだ所で大きな損をするからねえ』

と、述懷めいた。それが母の耳には天命だと云ふ觀念を與へる動機のよい餌であつた。母はソレ以上失望のふかまりへ入らふとし無かつた否却つて今迄の憂鬱の氣を夫の言葉に依つて拂ひ除け樣とする心の焦ちが仄見えた。

『許嫁は一體此の試驗を受けてるのを知つてるのかい?』

僕はカラリとした圖拔けた大きな聲を出した、それは殊更に作つたものであつた、斯うして憂愁の圍を破らふとした。

『さア——』

上田君は依然として調子は沈み勝ちであつた。

『知つてなけりやいゝが』

と、僕は上田君はそれを怖れるだらうと氣遣つた。

『そりや知れてませう、媒酌人は此息子の合格を信じて誇顔に話してあるに違ひありません』

と、母は素氣なく答へた。

『困りましたねえ』

僕は自分の事の樣に歎息した。

『相手がそれを吼つてゐたんだつたら合格の成行が解つてから約束しますよ、其麼事は何うでも宜かつたんでせう』

母は上田君に其の方への氣苦勞をさせまいとそれとなく樣子を偷み

ながら云つた。

『ぢや相手も見上げた女ですねえ、それで無くちや實際の心事が疑はれますよ』

と僕は防禦線を張ると同時に上田君の掛念を輕からしめようと務め、同時に此麼話を出さねば宜かつたと後悔した。

上田君は何時までも默念としてゐた。

* * * * * * * *

茲まで眞目面に運んで來たんだから眞目面で通さねば成らぬのだが然うは問屋は卸さぬ。

此の上田君は田舍の舊藩主なんだ、で夫れから間も無くの事、彼は

昔し自分の領地であつた或る片田舎へ先祖の百年祭の爲めに出掛けた古い墓は其の土地にあつたが爲めである。

さア喜んだのは土民共である、今の殿様がお出になると云つて大騒ぎ、殿様が此麼邊避へ迄み足を運ばれるのは勿體ない、子々孫々の語り草にしろと一張羅の着物を着飾つて花火を上げるやら、高提灯を張るやら、幔幕を廻らすやら。

彼は嚴然たる威儀の下に之等俗衆の敬禮を輕く受け流しながら、靜々と二人引の車を曳かせた。

『殿様だよ、お辭儀するだんべー』

と、呆然指を啣へて見詰めてゐる子供の頭を無理に壓へ付ける親もあ

る。

中には土下坐して御珠數繰合せながら、有難涙に搔きくれて、

『南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛』

と、御釋迦様待遇に異らず。

これ村の衆、その殿様は見ン事高等文官試驗に落第したべー。

◎養子難

己れの友人に宮川正民と○ふ男がゐる、これは古い時代から學校を出る迄己れと机を共にしてゐた。學校を卒業するや彼は直ちに某省に務めた、僕も又類を同じくした。年と云ひ家庭と云ひ同省に又顏を合

はすと云ひ莫迦に因縁が深い。

此の宮川君に唯一つ難がある、それは彼が身體が非常に弱いと云ふ事だ、それのみは全然己れの體質と反對であつた、だから彼は無暗と缺席した、それが爲めに上の者の氣受が餘り香ばしく無かつた、然し紹介した人がある銀行重役であつたから、その人に對しての遠慮でもあつたのか省としては彼を首切る處斷に出でなかつた。でいま〳〵しいと思ひながらも結局何うすることも出來なかつた。それを宮川べ知つてゐた、外にいゝ所があつたらと思ふ心と、どうせ僕の身體では務め人は駄目だから何處かいゝ養子口でもあつたら行きたいと密かに思ふてゐた。

それが一の原因、モ一つは一面彼の家庭が面白くない、父は最早大分の年だつたので外からも内からも隱居なすつた方が宜からうと云ふ事になつて年寄連は一時鎌倉に移つて了つた、その際正民を兄に預けて了つた、兄は陸軍少將で豫備になつた人で非常に俗に云ふお人好しであつたが、その妻なるは又頗る陰險な惡辣な性格の女だつた、彼は其處から毎日通ふてゐた。

宮川君には無二の知友が二人あつた、今大學助教授の福光(假名)君と僕であつた、此の福光と云ふ男は非常な優物で尋常二年から大學を卒業する迄一番でブッ通した稀なる俊才である。で之等がちよい〳〵宮川君の家へ遊びに行つてゐた。然るに僕は福光君と一緒に彼を訪づ

れる毎に惡辣である可き筈の兄の妻君の態度がガラりと變つて下にも置かぬ待遇をする、どうも變だ哩と僕のみ獨り首傾げてゐた。

又正民君に對しても物優しい、で彼は自分の父や母から嫂は並大低の女ぢやないと酢つぱく説き聞かせられてあつたが、同居して見ると其麼樣子は微塵もない、ない所か却つて正民さん〳〵と全でお客樣の樣にして呉れる。何うも可笑しいこりや屹度父母は年寄の僻目で嫂を誤解してゐるんだらうと宮川君は思ふてゐた。

所が兄と嫂の間に一人の娘があつた、年は十九、出身學校はお茶の水だがお茶の水出と云ふと何んだか美人に響くが其の娘は馬鈴薯の樣に肥えた醜い女であつた。もう年頃であるから何處かへ嫁に遣らなく

ちや成らないと云ふ考へが始終嫂の頭腦に往來してゐた、其處へ正民君が厄介に來る、從つてその友人が出入する。で自然に其の友人を物色すると西川には嫁があるが福光には未だゐないと云ふ事が解つた。で福光君の樣子を探ぐつて見ると得たり畏こしの人物、この人にこそ娘を配す可きものだと豫ねてから頷いてゐた。

一日嫂はにこ〳〵しながら正民君を其の室に訪ね茶菓などを持ち運びながら、時に貴方に强つてお願ひしたい事があるんですがと口を切つた、何だらうと座り直つて訊き質すと何卒不束な娘だが貴方の力でなんとかして福光さんに差上げる樣盡力して呉れまいかとの話、宮川君は吃驚して了つた、そして其の場は斷はり兼ね適當な返事をしてお

いた。

茲に其れ以前から宮川君と僕との間に之ならばと云ふ一人の才媛を福光君に推薦するのに定めてあつた、その女は嚴格なよりも寧ろ若い者に理解を持つた母と、温厚玉の如き父とに依つて育てられた娘で、縹緻の良いのと志操の堅實と家庭の善良なのと、且つ家柄が歴々の末流であつたから、之れならば福光君に嫁はしても敢て兄たり難し弟たり難しだらうと悉皆相談が纏つてゐた、此の一家は主人の都合上名古屋に引拂つてゐた、藤原と云ふ姓である。

宮川君は嫂の娘を嫌つてゐた、何故ならば何處かに嫂の血筋の陰險の影が潜まれてゐたからである、而已ならず其の醜顔に愛憎を盡か

して居たからである。然し彼は無氣に嫂の願を退ける譯には行かなかつたから、一日何氣なく而かも輕く「福光君は最早許嫁が定まつてゐるんだ相です」と答へた、その時の嫂の驚駭や如何に！凄い一瞥はギロリと彼れを射つた。

其の日からガラリと宮川君に對する態度は變つた、見てゐても冷めたい待遇する、問題の福光君が訪ねて行つてもお茶一杯出さなかつたそこで宮川君成程と始めて父母の言葉の眞を悟つた、矢つ張り音にきく嫂ぢや哩と頷いた。福光君は怜悧だから始めから既に嫂の素振りで大概の様子は呑めてゐた、然し彼は曖氣にもそれを口へは出さ無かつた。又宮川君とてそれを知らぬでは無かつた、だから自分一個人の姑

息の利益幸福の爲めに親友の一生を犧牲にするものぢや無いと深く心に期してゐたから今更嫂の態度に逡巡ろぐ事は無かつた。

斯う云ふ具合で彼は外は務先に於て、又一方家庭の此の有様で兩攻めに遭つてゐた、だから顏色が優れなかつた、鬱々として面白からぬ日を送つてゐた。

其處へ湧いて來たのが養子話である。話の糸口を出して來たのは或る田舍の町へ嫁いでゐる彼の實姉からであつた、宮川君の申分に依れば財産は五萬圓で娘は廿歳、母子三人暮らしであるとの事だつた、彼は早速己れに相談に來た、僕は彼の目下の周圍狀態や彼の性質人物に依つて推察し直ちに賛成の意を表した、彼も勿論其の氣であつた、だ

から話が中途で挫折しかゝつた時彼は總ての事を放棄して直ちに片田舍の姉の家へ馳せ、泣きつかむ許りに事の成就を依頼した、序にそれとなく娘も見、家も調べた、そして僕に對して娘は綺麗で家も持家が十數軒もあると云ふ事を語つたので、何も結構と己れは又も薦めておいた。その裡話はドン〳〵進行して彼は到頭苦しかつた嫂の迫害から免がれて去つて了つた。

玆で一言加へて置くが恰度その頃福光君は四國方面へ出張中であつたから相談する暇なく彼は急遽一刻も早くとおさらばを告げたのである。

其後彼れから改名披露のハガキが一回あつた限り杳として消息がな

かつた、あれ丈け親しくしてゐながら不都合千萬なと屢々峻烈な手紙を遣つたけど依然として音沙汰がなかつた、彼は名代の筆不精であると云ふ事は知つてゐるけど餘りと云へば失敬だと僕は獨りでブン〳〵憤つてゐた、別に彼の氣嫌を害ふことともしないんだがと時々首を捻つてる矢先其の頃四國から廣島に移つて或る研究に從事してゐた福光君から己れの所へ手紙を寄越し「一體宮川君は近頃何うしてゐるんだらう、幾程手紙を遣つても梨の礫である、君の方へ聞けば樣子が解るだらう、何卒彼の近況を知らしてくれ」とあつた。して見ると獨り僕の方へ音信が無い許りぢや無く總ての方面へ對して彼は此の非禮を敢てしてゐたんだ、何んと云ふヒドい奴だらうと愛憎を盡かして、それか

ら一回も手紙を出さなかつた。

すると或日の事僕の弟が「今日宮川君に逢つた」と告げたので、なアに人違ひだらうと笑つてゐたが、イヤ確かに宮川君だつたと剛情を張るのでそれぢや若しや久々で歸つて來たのかも知れないと其の頃再び鎌倉を引拂つて麹町に住ゐしてゐた彼の父母の家を訪ねて見ると成程彼はのつそり出て來た、一體何うしたんだと突然彼の筆不精を叱して憾みやら腹立やら、なつかしさやら交々胸に溢れた、今怒つたかと思へば早や笑ひして互に胸襟を披いた。その時彼は養家の事に就いては餘り語らずに「◎度僕の歸つたのは外でもない福光君と藤原の娘との結婚日を早く定めて了ひたいからである」と告げた。

福光君の縁談は嫂が彼麼提議して以來、こりや油斷がならぬと僕宮川君とは手ッ取り早く互に相談したのである、幸ひ兩方に異議なしと云ふ事になつて結納までも終り、最早結婚日を何日にするかと云ふ許りに進んでゐた。福光君は廣島から某大學の助教授となつて大阪にゐたので東京には不在であつた。許嫁は矢張り名古屋の兩親の下にあつた。

宮川君は表向き此の結婚の媒酌の位置にあつたが、養子に行つて以來音沙汰なしでゐたので、二人の婚儀も其の儘にうつちやつてあつたんだ、思へば重ね〳〵罪の深い男だが、逢つて見ると何んとも云へぬ親味のある男で自然に小言も憚る樣になつて來る力を持つてゐた。其

の晩僕は長く話を續けてゐた、何故か彼は養家の事に話が立入るとイヤに外らして了ふので不思議に思ひ、「今更己れに隱し立てするな、何か伏在した事がるに違ひない、それを一層打け明けて了つたら何うだ」と迫り寄つた、彼は始めの間は「決して其麼事は」と避けてゐたが、君は己れの竹馬時代からの友達ぢやないかと訴へたので、彼も存外情に脆く遂に一切を白狀した。それに依れば今彼の妻としてゐる女には既に宮川君が結婚する前に養子があつた事、而かもその女は三人も子供を產んでゐて二人は死し一人のみは未だ生き永らへてゐること、及び其の女は養父の實子でないこと。親父は貪欲で彼を動かすに顎を以つてし夥だしく彼の自尊心を傷くる事、妻は敎育はなく行儀なき眞の

田舍娘で氣に入らぬことそれに自分と同じく二十八歳の年增であるなどゝ縷々述べ立てた。

『一體其麼事は始めから知つて居たのかい？』と己は尋ねざるを得なかつた。

『誠は知つてゐたんだ』

と彼は申難く相に云ふた。

『其れなら何故己れに隱してゐたんだい、何故己れに僞付いて置いたんだい？』

と思はず大きな聲で云ふと、彼は慌てゝ四邊を憚る樣に制し、

『なんだか其麼事を云ふのが氣極りが惡くて、ツイあゝ云ふ體裁のい

ゝ具合に云つて置いたんだよ』

『なんだ養子に行くんなら！何故最早少し愼重に考へなかつた？學士なら幾程でも世の中のいゝ所から貰手がある、馬鹿な奴だナ』

と、己れも呆れた紛れに痛罵した、彼は最早何も云ふて吳れるなと頭を搔き搔き、小言で、

『それで僕は何かと面白くなかつたから病氣轉地療養に託けて出て來たんだ』

『始めからそれ等の缺點を知つてゐたなら今更不服が無い筈ぢやないか』

『それは然うさ、だけどツク〳〵僕の周圍の友人や知己の妻君と比べ

て見ると僕のが一等悪い、比較にならぬ、それに彼の時は突嗟で婿に入つたけど落付いて考へて見ると、幾程世の中に馬鹿が澤山居るとはいへ年増の而かも三人も子供の出產た女の所に收まつてゐるなどは男として忍び無いよ』

と今更になつて憤慨してゐる。そしてモ少し考へて決すれば宜かつたと後悔してゐる。へー？と僕は事情を聽き終つてからもへー？を繰返さゞるを得なかつた。

『汝の周圍を見よ、斯う思ふと起きても座づてもヂッとして居られぬ然うだらう君の妻君は美だし、吉田のも石黑のも。己れの女たてつら口は姥蛇の樣に大きいよ。』

と思はず眞目面な話を吹き出させる樣な事を云つて『あゝ』と苦笑を續けてゐる。そして胆氣だと逃げて來たんだが之は眞赤な虛言だ、隙があつから離縁て仕舞はふと思ふてゐる、いゝ智惠がないかとの相談を僕に持ち掛けた。

僕は當時胸襟を披いて語る眞の友人と云ふものが方々に散らばつてゐて一人も居なかつたので物足らなく思ふてゐた、そこへ宮川君が歸つて來たのだから、よく無い精神だが何んとかして宮川君を一刻も長く滯京せしめあはよくば此の儘ズル〳〵べつたりにして歸さないで置かうと思ふた、それには己れが宮川君の此の嫌氣に油を掛けるに如くは無かつた、其處で僕は學士ともあらう者が人の物笑ひだとか、君の

妻君は年増兼子供三人の嬶かいなどゝ其の時嘲笑つて見せ付けた。宮川君それにツリ込まれて己れだつて決心があるんだ決心があるんだと其の度毎に云ふた。

其の翌日彼は實家の父に福光君と藤原家との婚姻の打合せの爲めに名古屋及び福光君のゐる大阪へ明日出發すると申出た、父母は彼の病氣を氣遣つたが其れも說き伏せて遂々行く事に定めて了つた。大體母は最初から彼を養子に遣ると云ふ事は不賛成なのであつた、それを無理に宮川君は納得さして了つたんだけど母には未だ正民に對する未練が多かつた、涙で彼を婿にやり暇さへあれば彼の安否を氣遣つてゐたそれ程彼れ正民を可愛いかつたのである。だから母は彼が不意に案内

なしに戻つて來た時には思はず夢かと許り吃驚した、それ程喜びも甚だしかつた、で自分の傍より暫しなりとも離しておき度くは無かつた勿論旅へ出すなどゝは思ひの外であつたが、一面に於て正民の病氣その物がなんとなく疑を挿む餘地が多かつた、假病でないかと睨んでゐた、病氣と云へば病氣らしく、病氣で無いと云へば病氣で無いらしく思はれた。モ一つは正民が福光の問題に就いて餘ッ程頭を費やしてゐると夫ふ事を知つてゐた、本人が彼れ丈け力を入れてるんだから此の結婚問題の結着を◉く附けさした方が本人の重荷を輕からしめて宜からうと思ふた、それに養家にあつては正民が旅に出るなどは遠慮もあらうから今がいゝ幸だと同情を持つたので偖てそ所謂「可愛い兒に旅

をさせ」の結果を彼は捷ち得られたのであつた。

翌日彼は旅程にのぼつた。久し振りに濶大なる天地を自由に暢やかに呼吸することの出來た彼はよく〳〵嬉しかつたと見え、

『途上より一筆、富士の秀麗は眼のあたりに候、籠より拔け出でたる小鳥の如く清爽の氣宇茲に新たに御座候、人間生れて養子になる勿れの感今更深く候草々』

と云ふ樣な通信を寄せたのを見ても彼が内心如何に養家を嫌つてたかと云ふ事が推察出來る。以後彼れからは何等の消息も來なかつたが名古屋の藤原家の母なる人から僕に宛て丶此麼手紙が舞ひ込んだ、

『前略、正民さん拙宅にて一泊直ちに大阪へ御出立後御宅より親展書

やら電報やらにて事情は存ぜず候へども養家の御首尾如何かと甚だ案じ居り候。以前の絣の書生さんとは大違ひにて新調の御身まわり金時計ピカ〳〵後光眩ゆく思はず平伏いたし候』。

と、あつた。之に依つて察すると彼は内に潜む自分の心痛を隱して何も語らず唯用件丈け濟ませて立つたらしい、却つて自分の目下の悲境を棚に上げてさも〳〵若旦那風を吹かして車を横付けにした樣子が見える。何故自分の苦しい胸の秘事をあの同情に富んだ理解を持つた母なる人に打明けて相談しなかつたのかと僕は自分の事の樣に齒痒く思ふた。あの母に一切を曝け出して判斷を賴めば何をか悶々すべき又去就に迷ふ可きと推量した。それ程その娘の母と云ふのは一般より畏敬

を受けてゐる人格の人であつた。それを打明けなかつたのに依つて察すると彼は彼が當さに採らむとする道は正しからざるものだと云ふ事を自確してゐたらしい、それで云はなかつたらしい、然う思へば可哀想にもなつて來る。手紙と電報！何か養家から實家の彼に宛てた用件に違ひない、その用件も歸宅しろと云ふんぢや無からうかと僕には判ぜられる。

然し養家では絶對に彼は病氣であるものだと確信してゐた、だから彼が旅に出たなゞは思ひも寄らぬ事である。病床に伸吟してゐるとの事更に疑念が無かつた。それ程彼の此の度の旅行は秘密に行はれたのである。

又大阪の福光君の宅に於ても彼はあれ程親密な間柄に係はらず彼の內心の不快は打明けなかつたらしく察せらる。福光君から僕宛の手紙は夫れを證明するだらうと思ふ。

『宮川イヤ內山（養家の姓）の若旦那樣七日御入來今朝東京へ向はれ候メツキリ若樣振りの附いて參り候には感服致し候』彼は名古屋に於てしろ、大阪に於てしろ一切涼しい顏で濟まし込んでゐたらしい。肝心の福光君の結婚期日に就いてはどの方面からも聊かも記して無かつた此の緣談に就いては僕も多大の關係があるから、一刻も早く樣子を知りたいと宮川君の歸京を今か今かと待ち構へてゐた。

僕は福光君から斯くの如く今朝出發とあつたので直ちに彼の家を訪

ねたが未だ歸つてゐなかつた、子思ひの母は僕を捉へて「貴方も一つ穴の貉だから正民の行動に就いては一切詳しく知つて被居るんでせう、一體正民は何日歸るんです、もう養家から矢の如き手紙だし本當の所を云ふて下さい」と却つて逆襲の有様、僕は這々の體で自宅へ逃げ歸つた。

その翌朝僕の枕元へ宮川君からハガキが來てゐた、それは江の島から發せられたもので、見ると「悠々自適し明日頃歸京仕る可く候」とあつた、餘ッ程呑氣に構へてゐるらしい、此麼性の男でも無かつたにと僕は僕より彼の母の爲めに早く歸つて呉れゝばいゝにと念じてゐた。

それから二日後不意に彼は僕を訪ねて來た、そして結婚期は福光君の申分に依り明年にする事に決定したと告げて、流石は福光君だ、我々の無分別の者と違ふ哩と獨りで無暗に感心するので、漸次譯を訊くと、

『福光君は未來の事つまり自分が死んでからの事を今から心配してゐる、成程己れは今結婚してもいゝ、雖然も若し偶然にヒョッとしてこの儘倒れた時妻は何うしてパンを得る？須らく妻の爲めに安神な生活な道を講じて置かねばならない、それには結婚して了つては最早駄目であると思ふたので自分は結納交換するや直ちに彼女の家へ願つて英語を傚ひに遣つて貰つてある、そしていざ鎌倉の際女通辨として生活

して行かれる丈けにしたいと思ふてゐる、然うすりやバンに困る事はない、だから最う暫らく待つてくれとの事であつた。流石は福光君だ眼の付け所が高い、どうだオイ』と宮川君は己れ迄その感心仲間に引き入れ樣とする。

名古屋の方の意見は？と訊くと何も皆福光さんを信じてゐますから、たつた今欲しいと云ふなら今、五年後と仰言るなら五年後、萬事福光さんの御意の儘にしますとの事であつたから己れは其れを打ち破る丈けの議論も吐けなく結局遂々又來年まで延期することにしたと宮川君重要な用件を此麼具合に形無しにして了つて結局無駄足を使つた事に過ぎなかつた。然しながら彼は此の旅行の爲めに精神上多大の慰

安を得たと云ふ事はそれ等無駄骨に關して何等後悔の念を與へなかつた、云はゞ斯の好題を材として氣休めの爲めに旅行したとも思はれる節々が無きにしも非ずだつた。

第二に君の現狀に就いて何か兩家から尋ねられなかつたと僕は耳を欹てた。すると名古屋では貴方の奥樣は如何ですかなどゝ尋ねられたけど務めて避けて君の細君の話ばかりで體よく逃げて置いたと宮川君は冐頭に置き、

『然し福光君の所では困つた、彼のお母さんが僕の顏を見るや否や宮川さん何だか今の養家に不服を抱いてゐるんでせう、隱したつて駄目ですよ顏に書いてあります有體に仰言いと云はれたのには一服した否

と旨く外そうとしたけど駄目だつた、仕方が無かつたから何事もハイ〳〵と承はつてゐた、福光君及びお母さんは獨合點して決して何麽不快な事があつても養家を出るなどゝ云ふ考へを起してはならぬ、一口に數萬と云ふがそれが並大低で出來るものぢやない、又一旦婿となつたら少し位の不平は堪えてゐるのが當前だ、その内に幸ひは天から自然に降つて來ると懇々と訓誡、そこで僕は養子に行くものぢや無いとのみ云ふた。すると何故始め婿に行く前一應相談の手紙を下さらなかつたと征め付け、最後に今私の云ふた事は深く胸に疊み込んで置きなさい、然し若しよく〳〵の事があつたら仕方が無い、その時は貴方の思ふ儘になさるが宜しいとの言葉。實は僕は此の儘養家へ歸らぬ積り

でしたと打ち明けると、それでは不可ないと説服に説服を重ねられた僕も成程と思ふた。だから茲一週間後に又あの片田舎の町へ歸る、然う云ふ事に決心したから』

と、宮川君夢が醒めた樣な口の利き方をした、僕は今宮川君が東都を去つては又面白く語る友もないから何んとかして引き止める工夫は無いか知らと密かに考案を廻らした。

その日は斯くて會合は終つた、その後時々僕は彼を訪ねた、然るに彼の此の牢として拔く可からざる歸國の決心が何時しか又鈍つて以前に返つてゐた。彼は衷心は矢張り行き度くは無かつたのである、然し根が情に脆い男に出來上がつてゐるんだから福光君及び其の母から悟

されて一時は初志を翻がへしたものゝ、靜かに自分一人と云ふ者になつて考へて見ると矢張り刻まれた養家及びその妻に對する不快な念は打ち消す事は出來なかつた。福光君等の訓誡が次第に薄らぐと共に此の潜勢力はムク〳〵と頭を擡げて來た、其處へ僕は如上の理由で彼を放すまいと油を灑ぐもンだから堪らぬ、何時しか彼は再び實家に歸つて來たと同じい心理狀態に成つて來た。其處で己れは密かに彼が智囊となり家内の者に知れぬ樣細心の注意を拂ひながら互に前後策を講ずるに餘念が無かつた。

一方福光君の方でも又藤原家の方でも最早疾くに宮川君は養家へ歸つたものだと確信してゐた、その證據には何等の手紙も實家へ宛てゝ

來なかつた、却つて養家へ宛てた爲めに封筒で彼の方へ廻つて來た滑稽事が繰返へされた。雖然あまり其等に對する返事を宮川君は出さなかつた——實際東京から出せ無かつたので福光君は僕の所へ彼の近況を訊ねて來た。それには困つた、歸つて了たと云へば養家へドシ〳〵手紙が行くの憂があつたので、僕は『宮川君は依然病氣はか〳〵しからず未だに靜養』と云ふ返事を認めて出して置いた。それも僕は窮した處置で僕は宮川君がこの度の旅行中彼が名古屋に未だ滯在中だらうと思ひ一つの拙いながら漫畫を畫いて送つた、それには色々慨切なのが細かく多く並べ立てゝあつた、その裡に『病氣と僞はり一目散』とステッキ抱えて名古屋と云ふ看板へ駈け行く姿を畫いた、生憎それが

出發後に着いたので其のハガキは直ちに福光君の土地大阪に送られたその時皆麼して話し合つてゐる所へ折惡しく舞込んだから否應なしに見られて了つたと宮川君は云つてゐた。然う云ふ失敗があるんだから明敏な彼れ福光は病氣などゝ云ふ古い手は信ぜぬと我々は思ふてゐたが、さりとて此れ以上の良智慧が浮ばなかつた。で我々は唯此の謀略が福光云に判らねばいゝがと戰々恟々としてゐた。

計らずもこの間へ我等に對して一道の福音が授かつた、否福音と云ふよりも驚く可き報知に接したのである、更に此の報知の爲めに福光君に對してビクともせぬ我等に採りて良い口實が作られたのであつたと云ふのは宮川君の養父及び妻君から奇怪と云はふか何んと云はふか

恰んど口にすべからざる二通の手紙を受取つたからである、其の手紙は茲に無いから現文の儘と云ふ譯には至らぬが要點は斯うであつた。

『お前も知つてゐる通り俺は先般家内を亡ふた、何かと云へば不便で堪らない、で今度後妻を迎へたから其の積りで』

とあつた、それは親父の方である。嫁から來たのを見ると、驚く勿れ〳〵。

『お父様は今度貴方に相談もせずに嫁を迎へました、その嫁と云ふのが今年三十三歳です、お父さんは今五十九歳ですよ、私は二十八歳です、私より若い者を貰つてお父さん何うする氣でせう、お母さんと呼ばれませうか』

宮川君は駭然と驚いた、驚くよりも怒つた、怒つたよりも寧ろ呆き
れ返へつて暫し繰返し繰返し讀んだ、見る〳〵顏色を土の樣に變へて
了つた。

彼は第一苟くも自分と云ふ立派な養子がありながら後妻を貰ふに就
いて一言も相談しなかつた事を腹立てた、そして次にい〻年をしなが
ら嫁とは何んだ、而かも二十三とは呆れて物が云へぬ、妻が二十八で
悴も二十八で、お母さんとなる可き人が二十三とは何んだ？　悴の嫁
より若い母がどこを探してあると憤激した。それを母と呼ぶ事が何う
して己れに出來ると息卷いた。

それに自分は養子だ、嫁も實の子でない、父が此麽若い女を迎へた

んだから子供が產れる事は火を見るより明かである。その時の家庭の
波瀾重疊は如何に、又その女とても女だ、親父は五十九歲だ、何を好
んで其麽爺を目的に結婚したんだらうか、色か？　非ず、戀か？　非
ず、皆財產に目が眩惑んで來たに過ぎぬでは無いか、其麽女だ、一筋
縄の女ではない、必ず深い陰謀の針を含んでゐるに違ひは無いんだ。

それを母と呼べ？　馬鹿にしてゐる。大體親父の處置が氣に喰はぬ
彼奴は態々家庭に波を起すのを好むのか、それとも自分の財產を赤の
他人に渡すのが惜しく成つたのか。それならば何故此の己れを養子に
迎へた？　さアそれを聽かう。齡既に五十の坂を疾くに越してゐなが
ら何んの不自由を感じて新たに嫁を貰ふ？　それも良からう然し二十

三とは何んだ、己れに一言の相談も無かつたと云ふさへ堪忍袋が切れるのに増て此の不道徳此の不埒此の不様はッと宮川君は齒をギリ〳〵喰ひ絞つて憤怒の聲を發した。

稍して何思ひけむ宮川君ポーンと膝を打つて、然し待てよ之こそ勿氣の幸ひだ、好機逸す可からず、いゝ口實が見附かつた、此の事實さへあれば誰れに非難の鞭を加へられよう、芝居も愈々面白くなつた哩と快心の笑みを洩らし、

『あゝ之で漸つと福光君にも藤原さんにも申譯が立つ、運は成程いつ降つて來るかも解らないものだなアー――』

と、獨りで悦つに入つた。然うして以後取る可き方針に就いて己れに

相談を持ち掛けた。

茲に困つた事が二つあるんだ、それは宮川君は婿入りの際仕度金として五百圓と云ふ金を向ふから受取つてゐる、だから若し離縁問題を此方から云ひ出すとすれば差當り此の五百圓の一件が懸案になるだらうと思ふ。モ一つは宮川君の實姉が媒約人である、だから事が破裂するとして仲に嵌つた姉の迷惑たらない、殊に狹い田舍の町に同じく永住してゐるんだから猶更その迷惑も此の上なしである。だから此の際宮川君の方から離縁たいなどゝ云ひ出すのは非常な不利益を招ぐ事となつて來る。幸ひ相手では宮川君は未だ病氣で依然はか〳〵しく無いと思ふてゐる。勿論そう思ふ迄には堪えず疑ひの眼を張つて或時には

病氣見舞旁方貴地へ行くとか、某地まで來たから序に立寄る其の日は解らないがなど丶暗に嚇し文句を云つて寄越しそれとなく歸宅を急がしたけど宮川君は其手に乘らず何日なりともお出下さい、醫者は絶對に動く事を禁じてゐるからと聊かも曖昧な樣子を見せなかつたので、『では矢つ張り病氣は本當であつたか』と信じ切つてゐた。雖然宮川君の實妹はさも苦しかつたと見え絶えず一刻も早くと云ふ手紙を彼に寄越し續けてゐた。

僕は此の際斯う提議した、それは『其慮慾に迷ふて來る女だから尋常者でない、だから一層今君は一旦歸つたら何うだ、屹度其れ位の女だもの親父の禿頭より遙かに男振りのい丶君に惚れて來る事は解り切

つてゐる、其處でだ何かと甘い言葉を君に掛けて來るに違ひない、その時決然立つて此麼不道德な家に居られるもンかと後足蹴つて戻つて來い、それには親父は一言も出まい、世間體にも立派な申分が立つ、で無いと拙手すると君は其の五百圓を脊負はねばならん、それが面倒だ君の家にそれ丈けの金は無いぢやないか』

と、述べた。すると宮川君は五百圓位の金なんか己れも男だ何うにかする、高が五百圓位なんだ己れも男だと男を無茶に振り立てた。然し僕は借金は決してするもンぢやない、一生それが爲めに活動を妨げられると順々說いた。宮川君も遂に我を折つて了つたが一旦歸宅云々は飽く迄も不賛成を唱へたので僕の提議はその儘沙汰止みとなつて了つ

た。

遂に宮川君はまア斯うして僕は暫らく實家にゐよう、母も元來遣り度く無いんだから惡い顏もしない、父も始めは己れが長く逗留してゐるので養家へ對しての思惑でいゝ氣持ちもしなかつたらしいが、此の二十三歳一件で大變僕に同情して正民が勸まないのも無理ないと母に云つてゐた相だから何も兎や角云ふまい、僕は徐ろに最善の方法を考へ出す事にする、君も智慧を貸して呉れと云ふ事になつて當座は此の話許りで二人の會見は持ち切りであつた。

恰もよし此の良い口實が設けられて僕と宮川君が雀躍し合つてる時果して福光君は峻烈な一文を僕に寄越した。

『前略、時に宮川君は何うした、まだ東京に居るか、居るならば君の責任だぞ、君が宮川君が向ふへ行くのは厭だなと思ふ樣な心を起さす可き些の言動でも示すならば君は永久に惡友の標本として保存さる可き資格がある、我等遠方にある者は宮川君が行かぬを以つて全部君と見做す、云々』

其處で僕は茲ぞ一筆大に振ふ可き價値があると堂々と先づ宮川君の心理狀態から筆を起して家庭の內幕を曝け、進んで親父の宮川君に對する態度、作等を逐一精細に認め且つ以前養子のあつた事も今猶現にその遺した子供もゐると云ふ事も洩らさず報じ、かるが故に僕は惡友でないと諧謔一番して投函した。そして僕は心待ちに彼は彼の明晰な

る頭脳で何う判断を下すかと待つてゐた。折返し早速返事を手にするを得た。

『御手紙正に拝見、誠に宮川君には同情すべきである、而して同情すべき點は具體的には二十三歳、抽象的には此の後妻を迎へた養父の心根、只之れ一つである。其他の箇條はあげて問題にならぬ。茲に養子のあつた事も、子供の一人ある事も嫁の廿八歳なる事も又それが養父の實子で無い事も前刻既に宮川君承知の筈、今更聊かも苦痛を訴ふ可き限りでない。養父が後妻を迎へる事も必しも惡くは無い、只々二十三歳である。養子よりも若い其嫁――正に娘――それよりも五ッ年下な女を後妻を迎へて家庭が無事に治まると思ふか、一體全體養父の心

理作用を君はどう思ふ、若い嫁を貰つて實子を拵らへて之に財産を譲り度いのか、只單に家庭に波瀾を起し度かつたのか、不自然な戀の奴隷となつて他を顧みる暇が無つたのか、それとも單なる耽溺が望みだつたのか、第一第二ならば誠に手が附け様の無い話、第三ならば善惡は別として悲劇的の同情は幾分ないでも無い。第四ならばそれこそ聊かの思慮も無い愚物である。君は其の何れだと思ふ？　何れにしても呆れた話で宮川君の奮慨には誠に同情する。

然しだ、茲に一つ聞き度い事がある、宮川君の妻君の宮川君に對する感情は如何、何事も之れ一つで定まると思ふ、僕の推量では之が餘り香しく無いものでは無からうか、若し然うすると全く小原君には四

面楚歌で立つ瀬が無い。出産た子供一人だ、宮川君の歸京中に生れたんだから未だ見ぬ我子には宮川君の執着も薄からう、道德から判斷すれば何うか知らぬが普通の人情からして此場合宮川君が我子を見捨てると云ふことも深く咎める譯にも行くまい、子供に對して比較的執着の薄いのは男性の共通性だから。

さるにても生れた子は何うなるだらう、父は知らず、祖父はあれども祖父にして祖父にあらず、祖母にして祖母にあらず、兄弟にして兄弟にあらず、家族の殘らずが異つた系統の下に生ひ立ついぢらしさ、想像するだに涙である、悲劇の大なるものだ、宮川君は氣の毒だ、幾程見棄てると云ふても燐野の雉子夜の鶴、人知れず涙を絞る事も幾度

かあらう。

宮川君が正に採る可き手段は媒酌人を通じて先方の親類に其の苦痛を訴ふるにあると思ふ、勿論そうするのであらう、その結果何とか解決が附けば（例へば年寄夫婦と若夫婦とは財產を適當に分配して別居する事にするとか何とか）勿論養家へ歸る可きである、僕は之が最も實行仕易い解決法で仲人否先方の親類たるものが今と成つて採る可き只一つの努力の道であると思ふ、それも聽かれず全く現在の儘で歸れと云ふのを宮川君が行かぬとて僕は宮川君を非難はせぬ、行くなと勸めもせぬが。五百圓の借金を背負つては不可ない事は僕も至極同感、然し五百圓の中、形に殘つて居るもの全部を提供するならば無くなつ

た物は仕方があるまいと思ふ、法律の點になつて來ては僕等には分らぬが其れ程に話が破裂して了へば何とでも遁れる法は幾程でもあらうと思ふ。夜寒の候御自重を祈る、筆不精の宮川君へは手紙を出さぬが宜しく傳へてくれ給へ』

流石は福光君だ、簡にして明快、亂麻を斷つの慨を示した。

己れは之を宮川君に見せた、彼は福光君さへ斯う云ふ意見に傾むいたかと思はず莞爾とした、僕も晴れやかに笑つた、二人は互に見合はして又深長な笑みを交換した、

＊　＊　＊　＊　＊　＊

宮川君は今も實家にあつて形勢を觀望してゐる、事件は何う展開し

て行くか、目下は全く不明である。兎に角茲に宮川君の爲めに健康と祝福を祈つておく。

◎噂の御本尊

小原さんは始終家を轉宅りたい〳〵と口癖の樣に云ふてゐた、それは近所が惡いので子供の敎育上大變惡いからと云ふ理由であつた、それ故逢ふ人度に何處かに適當な家が無いか〳〵と御念佛みたいに唱へてゐた。僕も勿論訊かされたゐたから夫れとなく物色の眼を張つて注意して歩いておつた。

所が或日電話が豫ねてから名前だけ知つてゐる佐々木さんから掛つ

て來る、佐々木さんは己れよりかズッと年配で而かもある銀行の重役僕は第一に何うして僕の名を知つてゐるんだらうと首を傾けた、第二に一體なんの用事あつて僕に電話を掛けたんだらうと不審の眉をひそめた。

兎も角も受話器に耳を當てた。

『貴方のお名前と御性質は小原君よりよく聽いて存じてますが、私は佐々木です』

と響いて來たので、ハヽアンと合點する。

『時に貴方も頼まれて被居つた事と思ひますが、小原君の家ですナ、恰度適當なのが見附かつたんです。非常な良い場所で良い家なんです』

『ハヽア』

と僕は受太刀に成つて返事する。

『で一ッ申兼ねますが、貴方のお宅は小原君のツイ近所だと云ふ事を聽いてましたから、お歸りの時お知らせして下さいませんか』

『ハヽア』

と、例に依つて例の如し、

『家主の方では申込みが澤山あるので、急いでゐるんです、それを私は今日一杯待つて呉れると云ふ丈けの猶豫を願つてあるんですから、直ちに來て見て直ちに御返事して戴きたい斯う申して下さいませんか私の家の三軒向ふですから、兎に角一應私の宅へお出下さる樣にお願

ひして』

僕は今迄一言も喋べらなかつた、向ふの喋る丈け喋べらしておいたけど、今は此方も一言を呈せざる可からずに成つたので、

『モシ〳〵』

『なんですか』

『外でも無いですが、小原さんは今温泉へ保養に行つてゐて留守ですが』

『え？温泉へ？困りましたなァ』

さぞ困つた顔してゐるんだらうと思ふが、生憎見えやしない、稍沈默の後、何か思ひ付いたらしく、

『構ひません、それぢや奥様丈けで定めたら宜いぢやありませんか、大きな聲で云へないが、彼處の小原君は妻君の意見に從ふて是非を決定する方でチと何んの方ですからねえ』

こいつあ面白い事を云ふ親父だ哩。

『それに小原君は始終内を明け勝ちの方だから、寧ろ此の際妻君に全權を委任した方がいゝだらうと思ひますが』

『全く然うですねえ』

と、僕も快よく重役の云ひ分の面目を保たしめた返事して、

『宜しい承知しました、チと何んの方ですから妻君自身多分出馬するでせう、ぢや左様なら、御大事に、イヤ之は一寸云ひ過ぎました、左

様なら』

と、プツリ。

その日三時頃小原さんの宅を訪ねて委細を述べた、勿論小原さんはまだ温泉から歸つてないので妻君に逢つての話だ。僕は亭主の不在を知つてゐて訪ねて來る不都合な奴と妻君に思はれ度くなかつたし、又近所の口善惡なき連中に「オヤこいつ臭いぞ」などゝ途方も無い事を考へられては雙方の迷惑この上なしと思ふたので、平生の地聲に足を掛けて、天地碎けよと許り、障子がガタ〳〵震ふ樣な大聲で、余は斯くの如く公明正大であるぞと示す爲め咽喉の赤くなる位に「遠からむ者は承はれ」式を續けた。

妻君は半分耳を壓へる樣にして聽いてゐたが、僕の大音聲が終ると同時にホッとして、太皷の亂打を遁れたと云ふ樣な顏をして、

『そうですか、どうも故意々々御親切に有難う御座いました、何分目下良人が不在……』

『オッとお待ちさない、それは最早大丈夫な事は解り切つてゐるんですから』

『……?』

『奥樣の御宅はチと何んの方ですから』

『……?』

『いえさ、その、一寸云ひ惡いですナ、構ふもンか一層云ふた方が…

……が何んだか一寸具合が悪いなア』

と、僕事勝手に獨言して、勝手に頭掻き、

『よし決心した、私は云はむと欲すれば何んでも云ふ、腹立てなさると顔の恰好が悪くなりますよ、え――貴女の内はチと嫌本位ですから

ウハヽヽヽ』

と、ウハヽヽで無理に腹の立つのを巧みに壓へ付けて了つたものだから、奥様澁い笑ひを見せて、

『まア――』

と仕様事なしに。

『アハ……、まア其麼譯です』

『其麼譯でもありませんよ』

と嘴聊か平ならず。

『えーと、兎に角佐々木さんが急いで被居るんですから何はともあれ一應御覽なすつて、若し御氣に入つたら、電報が御主人の方へ御知らせに成つたら何うですか』

『然うですわねえ……こつと……ぢや今から早速參る事に致しますから』

と、云ふ具合に梟が附いて僕は其の儘其の日は歸宅して了つた。

翌日又歸途、一體何う結着したゞらうかと自分も間接ながら此の問題の一部分を占めてゐる身體になつたから稍心配と好奇心を持つて再

び小原さんを訪問して見た、例に依つて音聲雷の如し、

『昨日の家は何うでした？』

『えゝ、臺所が大變明るいんですよ、それに間數も此の家とは一ッ餘計にありますよ。だけど肝心の子供の敎育上がありますから、近所の樣子を探つて見ますと、矢張り其のあたりに細かい家が澤山あるんです、此處と餘り違は無いんです、ですから移つて又氣に入らないとあつても困りますし。それと比べると此の家は未だ良う御座ンすよ、公園が近いもンですから子供の遊び場所に不自由しませんからねえ』

『結局何うなさらうと云ふお考へですか』

『さア』

と首を捻つて、

『佐々木さんが故意々々親切に云つて下すつたもンですから、そのお顏に免じても』

『不可ません、不可ません』

と僕は裂しく首を振つた。

『其麼情實に捉はれて何うなさいますか、假令佐々木さんの口からであつたとて、未だ定め無いんぢやありませんか、定めたのを斷はるのは惡いし、又一旦人家つた上で暫らくで直ぐ轉つては却つて良くないですから、寧ろ今の內にキッパリお斷はりになつたら如何です、決して情實に捉はれては成りません』

『ですけど折角……』

『不可ませんッてたら！』

と僕は飽く迄も其の非を鳴らして、

『子供の事をお考へなさい、情實は弊害ですよ、假令あの人が銀行の重役だつて、家が氣に入らないから入らないんです、斷はつて不快な顏したつて夫迄ぢやありませんか、佐々木さんが借るのぢやあるまいし、いゝぢやありませんか』

と舌鋒鋭く成つて來た。

『然うですわねえ』

と、奥樣大分傾むいて來た。

『然うですとも！』

と、僕はシッペイ返し、

『幾程大銀行の重役だつて、若し其れを傘に着る樣な人だつたら』

と、僕ひとりで悲憤慷慨の熱憤を盛んに洩らしてゐると、何だか奥樣は慌てた樣な眼くばせをなさるので、顧みるとも無く顧みた。

呀ッ噂の御本尊！佐々木重役が今し入口の戸に手を掛けてゐるので

ヒエーとシドロモドロ、

『佐、佐々木さんは良い人です、左、左樣なら』

おなかの逆立ち 終

大正五年十二月廿八日印刷
大廿五年十二月三十日發行

【定價金五拾錢】

著者　奥野他見男

發行者　東京市神田區仲猿樂町十四番地　中野米藏

印刷人　東京市麴町區麴町二丁目九番地　小鹽信三

印刷所　東京市麴町區麴町二丁目九番地　小鹽印刷所

東京市神田區仲猿樂町十四番地

發行所　泰山房

振替口座東京【九〇七九番】

不許複製

奥野他見男著

大學出の兵隊さん（定價卅五錢郵稅四錢）十九版

女學校出の花嫁さん（定價四拾錢郵稅四錢）十二版

おへその宙返り（同上）二十版

先生様と生徒（同上）十版

初旅の凸ちやん（同上）新刊

取次販賣

848
848

終

泰山房發行